

前津中の玉遺跡

福岡県筑後市前津所在住居跡群の調査

筑後市文化財調査報告書

第 4 集

1987

筑後市教育委員会

前津中の玉遺跡

福岡県筑後市前津所在住居跡群の調査

1987

筑後市教育委員会

序

このたび、筑後市内三か所の文化財発掘調査を完了して調査報告書第4集を行すことができました。その一つは、国道209号線にはど近い大字前津字中の玉なる奈良時代の住居跡と大字藏数字東野屋敷の弥生時代甕棺墓で、いずれも宅地開発又は県道工事中に偶然に発見され、試掘に始まるものがありました。三つ目は下北島字井原口の奈良時代中頃の住居跡で、研究調査関係者の緊急調査結果によるものがありました。

いずれも、緊急のことと、地権者・施工者の田中洋右氏・県土木事務所並に筑後市農業協同組合には、このことの歴史的意義の重要性をよく御理解下さって、工事費の負担をも含めて多大の御迷惑をおかけしたことは誠に恐縮であり、かつ感謝に耐えません。

今回の発掘調査が郷土史研究と古代史解明の貴重な資料として大切な役割を果たすことを確信し、喜びに耐えません。

発掘作業は、嚴寒酷暑の中にも続けられました。この間、文化財に対する愛情と歴史研究への情熱を傾け、連日陣頭指揮に当られた県教委南筑後教育事務所の川述先生はじめ、作業に当って下さった関係の皆さん方に厚くお礼申し上げます。

文化財の研究愛護の情がますます深化拡充するよう念じて、この報告書を提出するものであります。

昭和62年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 中 島 栄三郎

例　　言

1. 本書は、筑後市が昭和60年度に緊急発掘調査を実施した3遺跡の報告書である。
2. 調査は、事業者側からの費用負担により、筑後市教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理は、福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導により、九州歴史資料館で行った。

写真撮影は、遺構を川述昭人、遺物は、九州歴史資料館の石丸洋氏の指導により藤美代子氏が撮った。

遺構の実測は調査担当者、調査補助員が行い、遺物の実測は平田春美、原富子、松岡生子氏にお願いした。遺構・遺物の製図は豊福弥生氏が担当した。

4. 本書の執筆は、IIを田中康信が行い、I、III、IV、V、VIを川述昭人が担当した。
5. 本書の編集は川述昭人が行った。

本　文　目　次

| | |
|------------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| II. 位置と環境 | 2 |
| III. 藏敷東野屋敷遺跡の調査 | 4 |
| IV. 井原口遺跡の調査 | 17 |
| V. 前津中の玉遺跡の調査 | 22 |
| VI. おわりに | 48 |

I. はじめに

昭和60年度における筑後市内の埋蔵文化財発掘調査は、藏数東野屋敷、井原口、前津中の玉の3遺跡である。

藏数東野屋敷は県道八女・城島線の付帯工事中に襲棺墓が発見されたため、福岡県八女士木事務所の協力を得て、昭和60年4月22日～4月27日の間、調査を実施した。

井原口遺跡の調査は、筑後市農業協同組合の倉庫建設工事に伴って実施したものである。筑後市農業協同組合より提出された事業計画の審査段階で試掘調査が必要と判断され、試掘調査の結果、本調査を実施した。調査に要する経費は事業者側に負担して頂いた。

発掘調査は昭和60年6月14日～6月18までの間で実施した。

前津中の玉遺跡は、分譲住宅建設計画が筑後市に提出されたのを受けて、県・市教育委員会で現地を調査し、文化財が所在することが予想されたため、試掘調査を経た後、本調査を実施した。調査に要する経費は事業者側に負担して頂き、昭和60年12月9日～12月25日までの間で発掘調査を実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者

| | | | | |
|----------|--------|-------|-------|------------------|
| 筑後市教育委員会 | 教育長 | 中島栄三郎 | | |
| 社会教育課 | 課長 | 下川 郁男 | 社会教育係 | 光延 久幸 〔文化財担当〕 |
| | 社会教育係長 | 江崎 仁淳 | " | 田中 敦士 |
| | " 主査 | 津留 忠義 | 体育係長 | 本村 伸道 |
| | " 係 | 黒田 洋一 | " 係 | 本村 正晴 |
| | " | 松尾恵美子 | " | 田中 純彦 |
| | " | 野口 明美 | | |

調査担当者 福岡県教育庁南筑後教育事務所 社会教育課 技術主査 川述 昭人

調査補助員 (藏数遺跡) 佐土原逸男

(藏数・前津遺跡) 田中 康信

このほか、遺構実測に際しては南筑後教育事務所主任主査沢田俊夫氏の援助を頂いた。

3遺跡の調査関係者である、福岡県八女士木事務所、筑後市農業協同組合、田中洋右氏には調査に関するご理解とご協力を頂いた事を深く感謝致します。

(発掘調査作業員) 角ハツ子、愛川一枝、角佐智子、塙本キサエ、井上砂子、塙本サナミ、中村ミヨ子、野田明子、大坪慶子、虹川町子、渡辺章子、松延秀子、古川スミ、江崎ユキ子、水田宮子、江崎幸子、西坂ヨシエ、本村福子、成清みね子、古賀幸代、永松久美子、渡辺文子、東さち子、北島みゆき

II. 位置と環境

前津中の玉遺跡は、筑後市大字前津字中の玉に所在する中位段丘上に立地した遺跡である。

筑後市は、福岡県の西南部に位置し、筑後平野のほぼ中央部をしめる。遺跡の北は、脊振山系、東に水繩山地の西端の高良山、南に筑肥山地の北端の山々が、遠くに望める。また、西には、国鉄鹿児島本線や国道209号線が市の中央部を南北に貫き走り、江戸時代に宿場町として栄えた旧羽大塚町並みを残す筑後市街地を近にみる。国鉄鹿児島本線（羽大塚駅）から北東に約1.5km、また筑後市街地の北端部にあたる羽大塚中学校からは、北東約400m程の距離にある遺跡周辺は、平坦な中位段丘上にブドウ畠が拓けている。

市北部は、水繩山系より南に派出した八女丘陵（標高30~40m）東方の八女市、八女郡広川町から西方にある三瀬郡三瀬町の東部に至るまでの10数kmにわたって細長く延びている。

丘陵北側の急な斜面を下ったところで、久留米市と接する。南側は、緩やかな斜面となり、いたるところに平坦な低位台地（標高15m~20m）を形成し、市街地あたりで中位段丘から低位段丘へとうつりかわる。

市南部は、蛇行しながら西流し、有明海に注ぎこむ矢部川を都境として山門郡潮高町と接し、発達した低位段丘が、西方の三瀬郡の沖積低地へとうつり、肥沃な筑後平野を形成している。^(註1)

筑後市内における主な周辺の遺跡としては、縄文時代の裏山住居跡遺跡、弥生時代前期~中期の住居跡や墓地遺跡の常用遺跡、中期の豪棺群の蔵敷東野屋敷遺跡、弥生後期から古墳時代^(註2)初め頃の住居跡群、上北島孤塚・下北島遺跡などが低位段丘、低台地に立地している。^(註3)

古墳時代になると、高江地区で、昭和32年に箱式石棺等が10数基発掘されていると聞く。また、八女丘陵上に瑞王寺古墳（5世紀後半）があり、隣接する広川町所在の前方後円墳、石人山古墳（5世紀中頃）は、すぐ近くにある。

奈良時代には、当遺跡の近くの前津字車路、藤島地区は、「延喜式」に記載された古代駅家、葛野駅に比定され、議論されている。^(註4)

このほか、奈良期~平安期に推定されている石塚寺跡の布目瓦が昭和初期に長崎地区で採集^(註5)され、平安後期の滑石経（県指定文化財）が、若菜八幡宮境内で出土している。

註1. 筑後市文化財調査報告書 1集「裏山遺跡」

2. 筑後市文化財調査報告書 2集「孤塚遺跡」

3. 筑後二川郷土史 昭58など

4. 筑後市文化財調査報告書 3集「瑞王寺古墳」

5. 『古代文化』35巻7号



1. 藏敷遺跡
 2. 藏敷東野屋敷遺跡
 3. 若菜経塚道路
 4. 井原口遺跡
 5. 狐塚遺跡
 6. 羽大塚町囲
 7. 石人山古墳
 8. 弘化谷古墳
 9. 欠塚古墳
 10. 前津中ノ玉遺跡
 11. 前津遺跡

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

III. 蔵数東野屋敷遺跡の調査

1. 調査の概要

遺跡は県道八女・城島線に面した筑後市藏数字東野屋敷に所在する。当該地は筑後市文化財分布図では、藏数遺跡に包含されるが、これは、広範囲の遺跡であるため、今回の調査地点について小字名をとり、藏数東野屋敷遺跡とした。

当該遺跡は、いわゆる八女丘陵の西側端部にあたる標高15mの頂部付近に営まれている。調査の範囲は、道路に接した北側部分の5m四方にあたる25m²程度である。検出された遺構は、弥生時代中期前半の甕棺墓7基と、同時代と思われる土壙墓1基である。これらの甕棺墓、土壙墓は、いずれも東西に走向する丘陵尾根筋に、平行に築造されている。

甕棺の年代については、瀬高町権現塚北遺跡出土の甕棺をもとに、南筑後の甕棺の編年を行っているので、これをもとに分類し、年代を記述した。南筑後における、弥生中期の甕棺をI・II類に2大別し、夫々を再にa～cに3分類した。I類は中期前半、II類は中期後半であるが、当該遺跡出土品はすべてI類の範疇に含まれる。a、b、c類についてはa→b→cと新しくなるものである。

2. 遺構と遺物

a. 甕棺墓

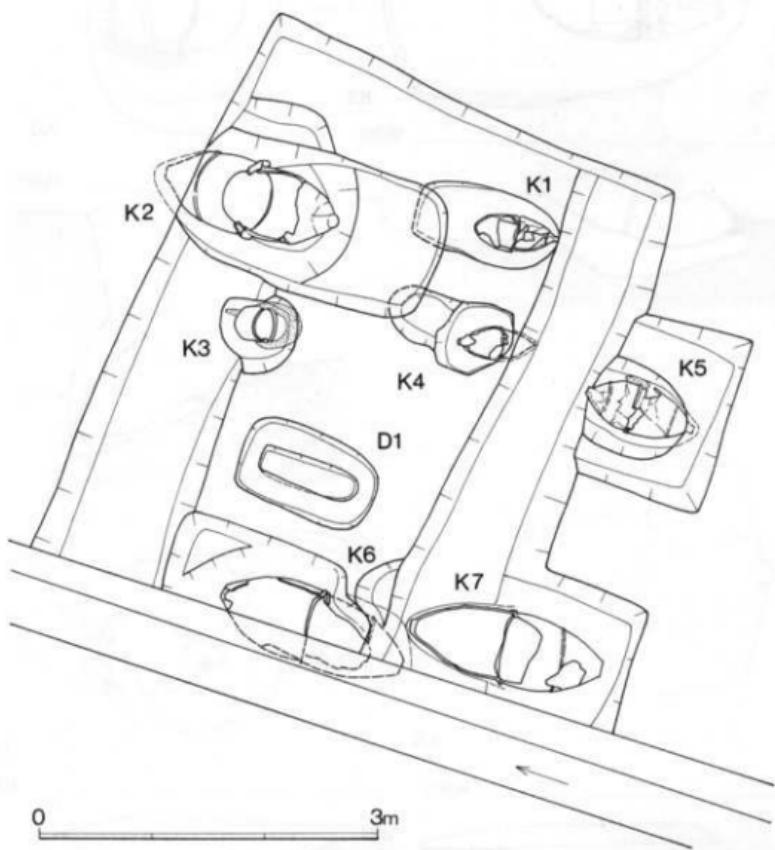
1号甕棺墓（第3図、図版1・2）

2号甕棺墓の墓壙の一部を切って造られた小児棺であり、2号棺を意識したものと思われる。上・下棺とも甕形土器を用いた接口式の合せ口甕棺墓であり、上甕の底部は耕作により削平されている。棺の主軸はN-80°-Wであり、頭位は西側にとる。埋蓋角度は13°である。

1号甕棺（第7図、図版4）

上甕 底部を欠損する。口縁部は水平であり、内側に発達している。胴部外面は刷毛目があり、内面はナデ調整する。胎土に細砂粒が多く含んでいる。焼成は良好であり、褐色を呈する。

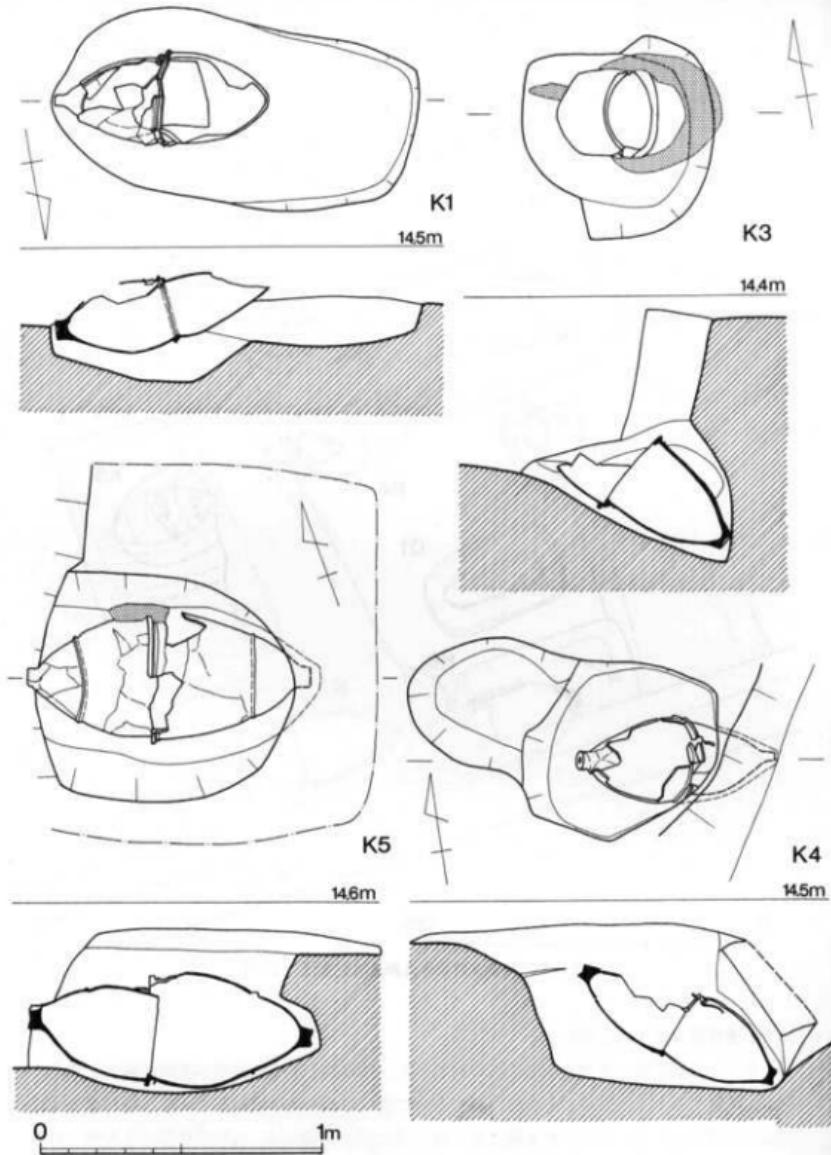
下甕 口縁部は内傾へわずかに傾斜している。底部は上げ底であり、底径6cm、厚さ3.4cmを測る。口縁部直下にはヘラ状器具による平行沈線が入る。外面は刷毛目があり、内面はナデ調整する。胴部外面に煤が付着する。上下甕とも、中期前半の南筑後K I b式に属する。



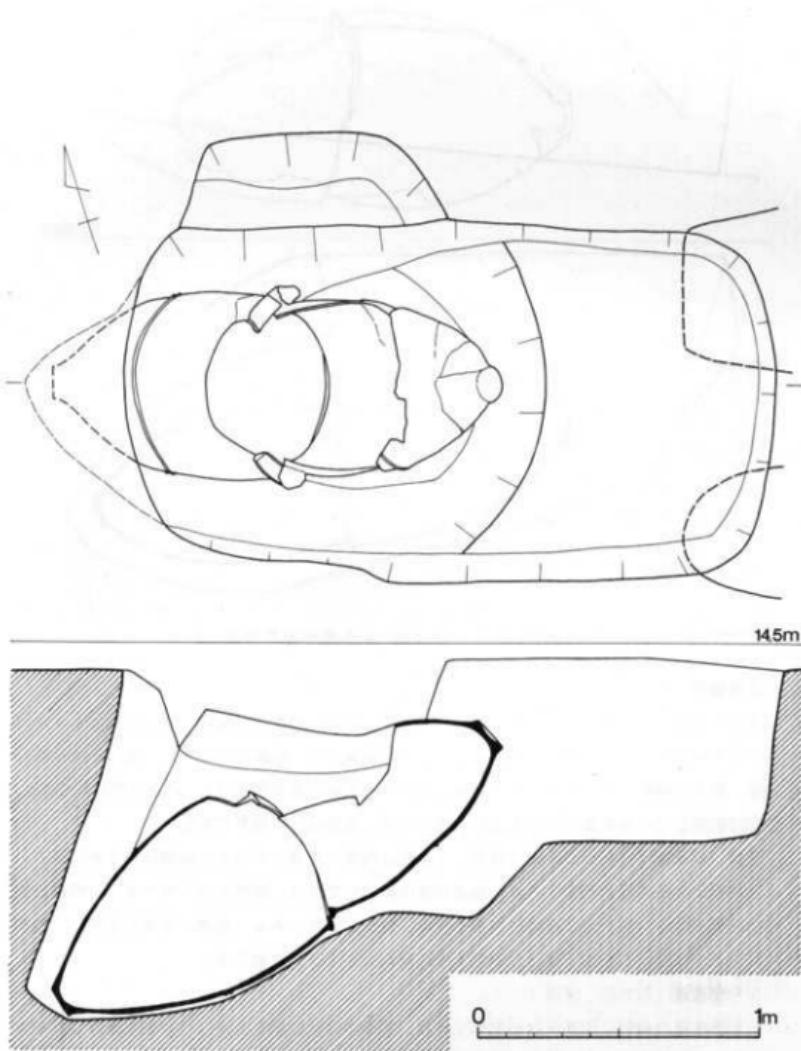
第2図 藤数東野星敷跡構配図 (1/50)

2号甕棺墓（第4図、図版1・3）

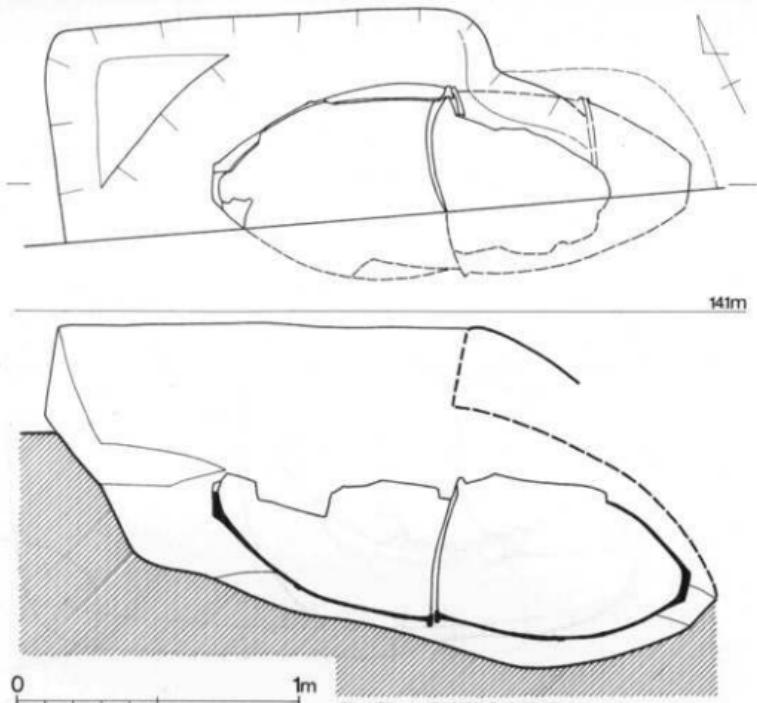
1号、4号甕棺墓に墓壙の一部を切られている。長方形を呈する墓壙の西壁に横穴を穿って下甕を埋置する。上・下棺とも甕形土器を用いた接口式の合せ口甕棺墓であり、接合部には青色粘土で目貼りしている。棺の主軸はN-72°-Wであり、頭位は、当該甕棺墓のうち唯一の東側にとるものである。埋置角度は32°とかなりの傾きをもつ。



第3図 1号・3号・4号・5号櫛棺墓実測図 (1/20)



第4図 2号墳棺室実測図 (1/20)



第5図 6号槨墓実測図 (1/20)

2号槨棺 (第8図、図版3)

上蓋 口縁部は三角口縁の変形した形態であり、内側へわずかに発達する。胴部はわずかにふくらみを有し、最大径部は胴部中央より上方に位置する。胴部の中位下に一条の三角凸帯が入る。胎土に砂粒が多く含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈し、内面は黒塗りである。外面は剥落しているが部分的に刷毛目が遺存する。内面はナデ調整である。

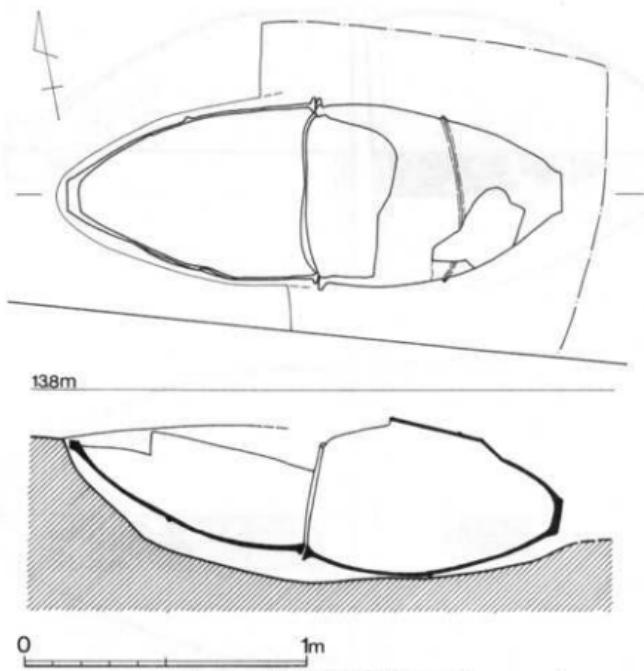
下蓋 口縁部はわずかに外側に傾斜し、端部は内側へ発達している。胴部はわずかにふくらみ、中程に2条の三角凸帯が入る。胴部外面は磨滅しており、調整法は不明であり、内面は板状工具痕が残る。胎土には細砂粒が多く含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈し、底部には黒斑が付着する。上下蓋とも中期前半の南筑後K I b式に属する。

3号槨棺墓 (第3図、図版1・2)

2号槨棺墓の南側に位置する小児棺である。墓壙の東壁に横穴を穿って下蓋を埋置した接口式の合せ口槨棺墓である。接合部周辺の広範開を粘土で被覆している。棺の主軸はN-80°-Wであり、頭位は西側にとる。埋置角度は37.5°と傾きが大である。

3号槨棺 (第7図、図版4)

上蓋 口縁部は水平であり、内側へ発達している。胴部外面は目の細かい刷毛目が入り、内



第6図 7号墓室実測図 (1/20)

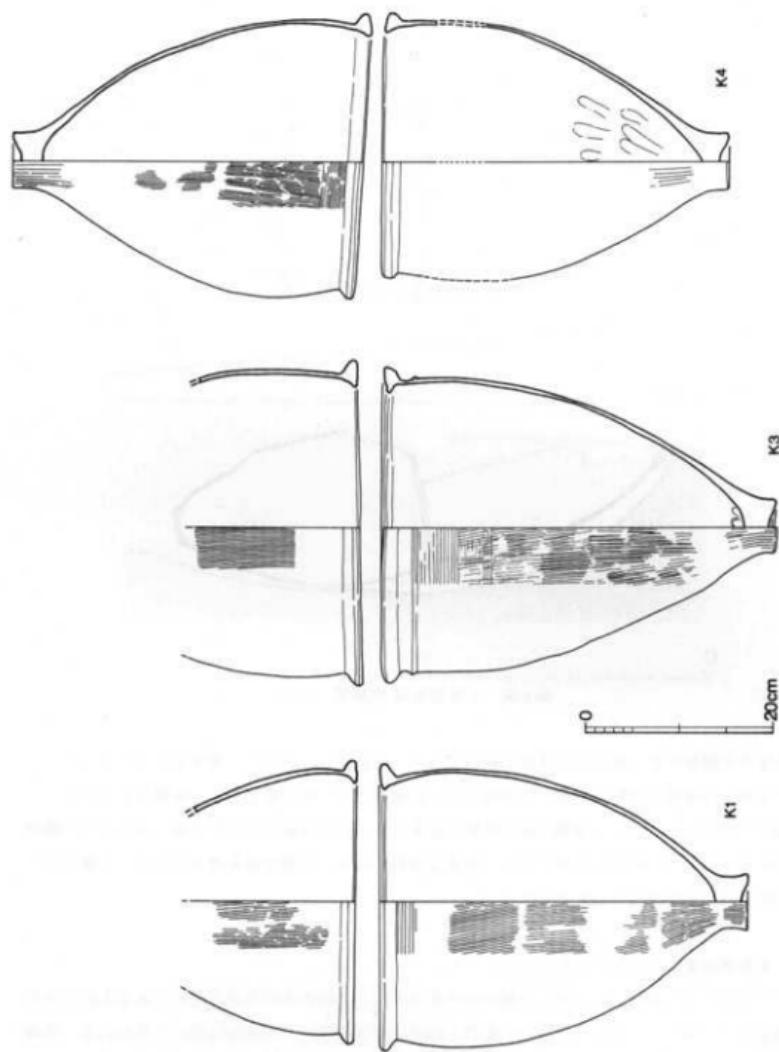
面はナデ調整する。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。

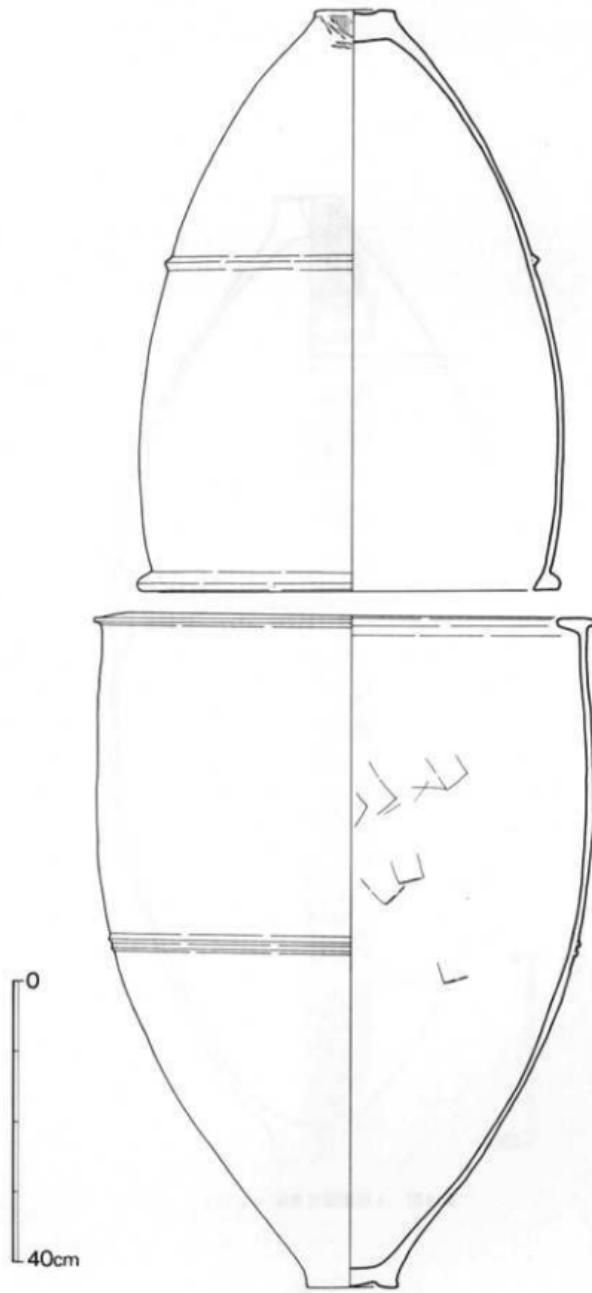
下腰 口縁部は内側へ発達し、内傾する。口縁直下に三角凸帯が入る。底部はわずかに上げ底で、底径5.7cmを測る。胴部上面は横刷毛目があり、以下は縱刷毛目に入る。内面はナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好である。上腰は南筑後K I b式、下腰はK I c式に属する中期前半のものである。

4号墓室 (第3図、図版1・4)

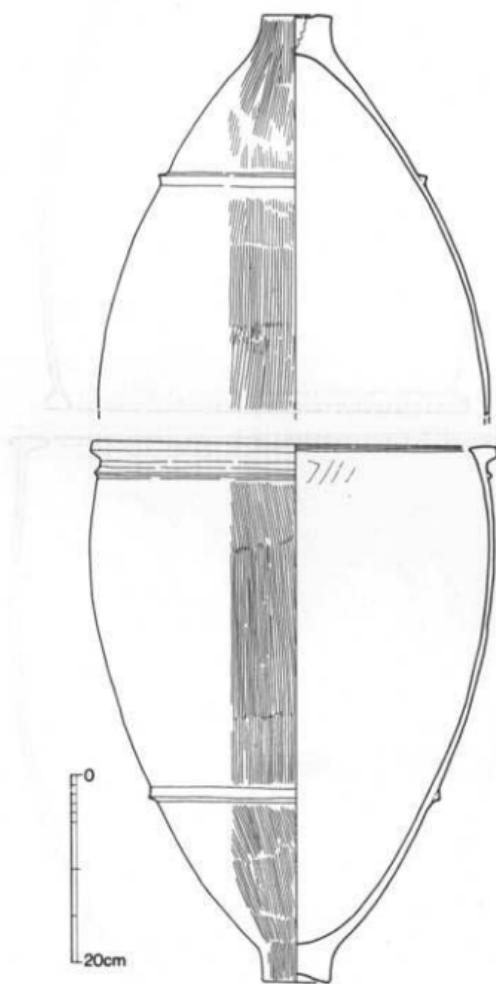
2号墓室の墓壙を一部切った様な形状を呈する。墓壙の平面形は不揃いであるものの方形状を呈し、西側に1段つく。この一段つく部分は当該墓壙との関連性は薄いと思われる。墓壙の東壁に横穴を穿って下腰を埋置した接口式の合せ口窓棺墓である。棺の主軸はN-82°-Wであり、頭位を西側にとる。埋置角度は30.5°である。

第7圖 1號・3號・4號鐵管測圖 (1 / 6)

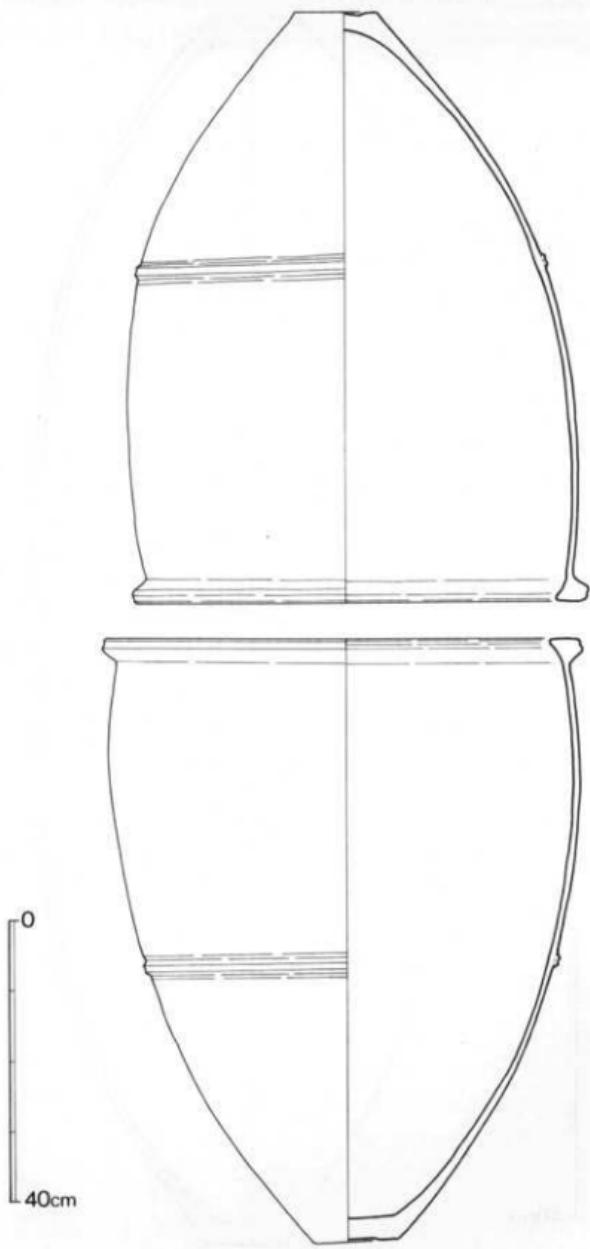




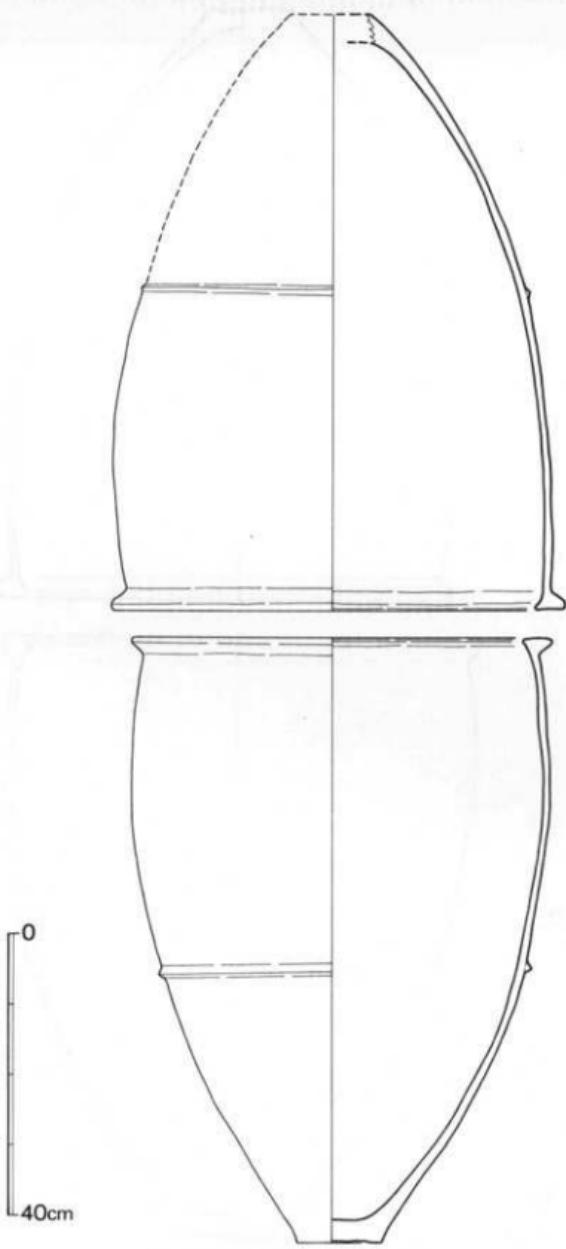
第8図 2号墓室実測図 (1/8)



第9図 5号墓棺実測図 (1/6)



第10図 6号墓室実測図 (1/8)



第11図 7号 収棺実測図 (1/8)

4号壺棺（第7図、図版4）

上裏 口縁部は三角口縁の変化した形態であり、外側へ傾斜する。底部は上げ底であり、底径6cmを測る。胴部外面は目の細かい刷毛目が入り、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。

下裏 口縁部は三角口縁の変化した形態であり、外側へ傾斜する。底部は上げ底であり、底径5.1cmを測る。外面は磨滅しており、調整法は不明である。内面はナデ調整であり、下半部は指頭圧痕が入る。胎土には細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。褐色を呈する。

上・下裏とも、中期前半の南筑後K I b式に属する。

5号壺棺墓（第3図、図版1・2）

発掘区の断面に底部が一部露出して検出されたため、東側に拡張して調査を行った。上裏は口縁部を打ち欠いた壺形土器を用いた接口式の合せ口壺棺墓である。棺の主軸はN-71°-Wであり、頭位は西側にとる。埋置角度は4.5°と緩やかで水平に近い。

5号壺棺（第9図、図版4）

上裏 口縁部打ち欠きである。胴部の中程より下方に三角凸帯が入る。外面は目の粗い刷毛目が入り、内面はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。黄褐色を呈しており、外底部に黒斑が入る。

下裏 口縁部は水平であり、内側に発達している。口縁部直下に三角凸帯が入り、ややふくらみを有する胴部の中程より下方に三角凸帯が入る。外面は刷毛目が入り、内面はナデ調整である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。年代は中期前半の南筑後K I b式に属する。

6号壺棺墓（第5図、図版1・2）

発掘区の南側端部に位置し、一部は道路側壁下にあり、工事により一部破壊されている。7号壺棺墓に隣接するが切り合いは見られない。長方形を呈する墓壙の東壁に、横穴を穿って下裏を埋置した接口式の合せ口壺棺墓である。棺の主軸はN-64.5°-Wであり、頭位は西側にとる。埋置角度は11°である。

6号壺棺（第10図、図版4）

上裏 口縁部は三角口縁の変化した形態であり、内側にやや発達している。口唇部に凹線が入る。胴部はややふくらみを有し、胴部中程より下方にM字状凸帯が入る。内外面ともナデ調整を施す。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。

下裏 上裏を一通り大きくしたもので、手法、特徴等は上裏と同じである。上・下裏とも、中期前半の南筑後K I a式に属する。

7号甕棺墓（第6図、図版1・3）

6号甕棺墓の東に隣接しているが、切り合いは見られない。接口式の合せ口甕棺墓であり、上甕は側壁工事に伴って上半部を欠損している。棺の主軸はN-80°-Wであり、頭位は西側にとる。埋置角度は10°である。

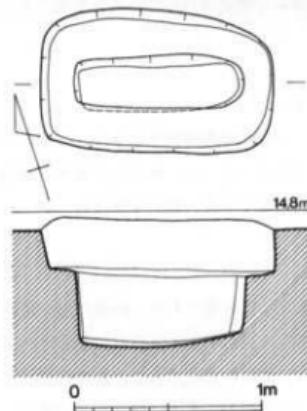
7号甕棺（第11図、図版4）

上甕 口縁部は水平であり、内側に発達している。胸部はわずかにふくらみを有し、胸部中程よりやや下方に三角凸帯が入る。内外面ともナデ調整である。胎土に細砂粒、雲母を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。

下甕 口縁部は水平であり、内側に発達している。胸部中程よりやや下方に三角凸帯が入る。内外面ともナデ調整である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好である。黄褐色を呈しており、底部近くには黒斑が入る。上・下甕とも中期前半の南筑後K I b式に属する。

b. 土壙墓（第12図、図版2）

発掘区内から1基検出された。土壙の平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸124cm、短軸75cm、深さ25cmを測る。土壙中央部には、内法で長軸85cm、小口幅22cm、深さ30~40cmの墓壙を掘る。主軸はN-72.5°-Wをとり、床面東側のレベルが高いため、こちらを頭部とすれば頭位は東にとるものと思われる。



第12図 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)

IV. 井原口遺跡の調査

1. 調査の概要

遺跡は、筑後市下北島字井原口に所在し、鹿児島本線沿いの標高11m程の微高地に立地している。農協の倉庫建設用地である水田にトレンチを入れて遺構の範囲確認を行い、遺構の所在が確認された用地南半部分の発掘調査を実施した。

調査の結果、奈良時代中期にあたる8世紀中頃の竪穴住居跡1軒と、同時期と思われる掘立柱建物1棟、土壙3基、柱穴等が検出された。住居跡から土師器を出土したが、他の遺構からの遺物の出土はみられなかった。

2. 遺構と遺物

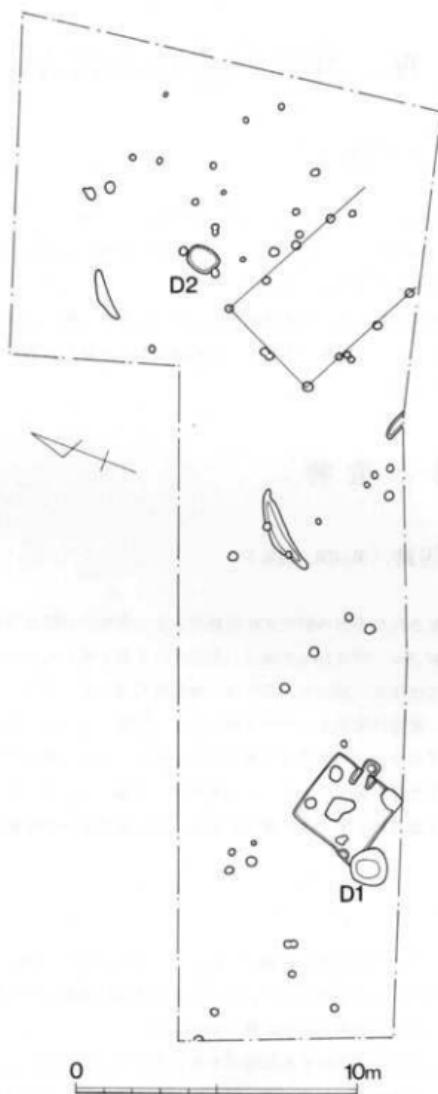
a. 竪穴式住居跡（第14図、図版5）

発掘区の西側で発見された小形の竪穴式住居跡である。平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸2.9m、短軸2.8m、壁高10cmを測る。主柱穴は4個と思われるが、北壁の2個しか検出されなかった。柱穴は径30~40cmで、深さは5cm程度の浅いものである。中央部には、不整形の浅い土壙がある。東壁の中央からやや北側に寄った位置にカマドを付設する。カマド中央部の床は若干凹ませており、この部分は火熱を受けて硬い。カマド奥の煙り出しに通じる部分の底面を掘りくぼめて土器を据えている。このカマドの右脇のコーナーには、長軸75cm、短軸58cm、深さ40cmで隅丸長方形を呈する貯蔵穴がある。北、西壁ぎわの床面には深さ3cmで幅の狭い壁溝を有する。

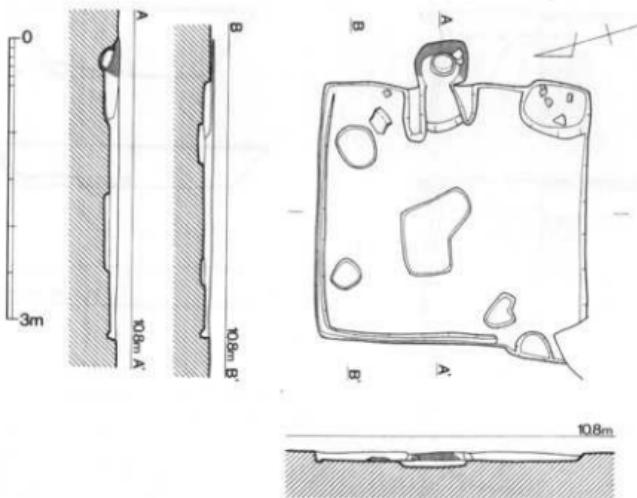
出土遺物（第15図）

遺物の出土状態は、カマドの左側から甕2、杯4が、カマド内から甕1・7、鉢3が、南東コーナーの貯蔵穴から杯5・6が出土した。ほとんどの土器は破碎した状態であったが、鉢だけはカマドの煙り出し部分に埋め込んだ状態で出土した。

甕（1・2・7）1は大きく外反する口縁部を有しており、わずかにふくらむ胴部外面は刷毛目が入り、内面はヘラ削りを施している。頸基部から胴部上面にかけて煤が付着する。胎土には細砂粒と雲母を含んでおり、茶褐色を呈している。口径26cmである。2は1に比してやや



第13図 井原口遺跡遺構配図 (1 / 200)



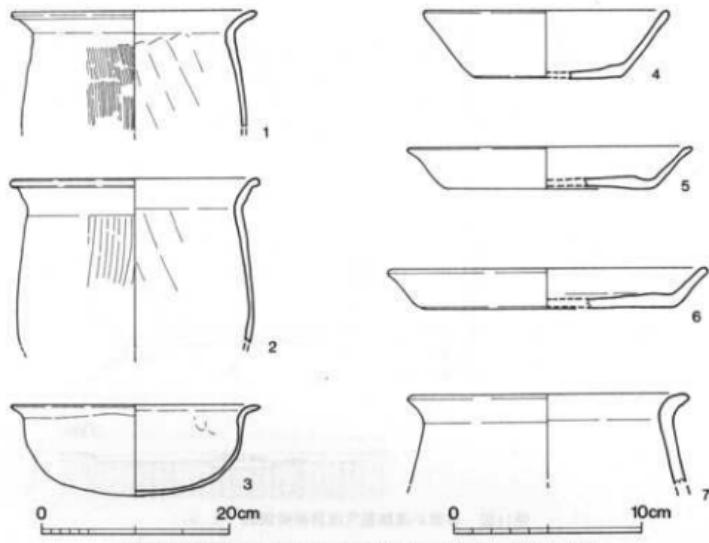
第14図 井原口遺跡竪穴住居跡実測図（1/60）

傾きの少ない口縁部を有し、端部は丸くつくられている。胴部外面は目の粗い刷毛目があり、内面はヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。口径26.4cmである。7は小形甌であり、短く外反する口縁部を有する。内面はヘラ削り調整である。胎土に大粒の砂粒を含み、茶褐色を呈する。

鉢（3） 口縁部は大きく外弯し、頸基部内外面に指頭圧痕が入る。全体に薄手造りであり、底部外面は静止ヘラ削りし、内面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は、外面茶褐色、内面灰褐色を呈する。口縁部外面は煤が付着する。口径26.5cm、器高9.7cmを測る。

杯（4～6） 形態から2種類に分類できる。いずれも底部外面はヘラ削り調整である。色調は黄褐色を呈しており、胎土には細砂粒を含む。4は口径13.1cm、器高3.6cm、底径8cm、5は口径15.2cm、器高2.2cm、底径11.2cm、6は口径17.1cm、器高2.1cm、底径13cmを測る。

出土した遺物はいずれも8世紀中葉に比定されるものであり、住居跡の年代は、奈良時代中頃に比定される。



第15図 竪穴式住居跡出土土器実測図 (1/3, 1~3は1/6)

b. 掘立柱建物 (第16図、図版6)

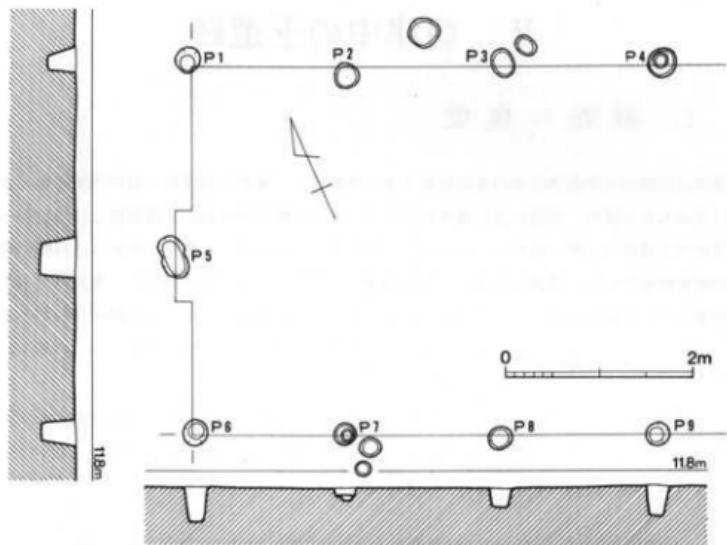
発掘区の東側部分から検出された2間×3間の建物である。建物の東側延長部分は搅乱されているため、本来はあと1間程度大きくて、2間×4間であった可能性が強い。主軸方位はN-65°-Wを示す。各柱穴間は、ほぼ均等の間隔をもち、桁行柱間は165cm、梁間柱間は197cmを測る。柱穴の深さは、P 1-29cm、P 2-14cm、P 3-19cm、P 4-27cm、P 5-38cm、P 6-36cm、P 7-12cm、P 8-17cm、P 9-32cmを測り、P 4とP 7は2段掘りである。

柱穴からの遺物の出土は皆無であるため年代は決め難いが、竪穴式住居跡に近い年代を考えることができよう。

c. 土 壤

1号土壤 (第17図)

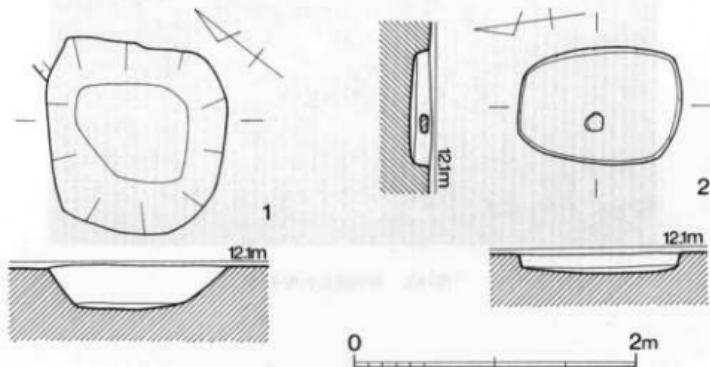
竪穴式住居跡の南西コーナーを切って造られている。平面の形態は隅丸方形を呈しており、規模は、一辺135cm、深さ51cmを測る。土壤内からは土師器の甕、杯の破片が出土したが、遺物は小片であるため図示しなかった。



第16図 井原口遺跡掘立柱建物実測図（1/60）

2号土壙（第17図）

掘立柱建物の東側で検出された。平面の形態は隅丸長方形を呈しており、規模は、長軸114m、短軸81cm、深さ15cmを測る。土壙内の中央部には、底面から5cm程浮遊した状態で径10cmの大の石が1個検出された。



第17図 井原口遺跡1・2号土壙実測図（1/40）

V. 前津中の玉遺跡

1. 調査の概要

遺跡は筑後市大字前津字中の玉に所在する。当該地は、東の八女市から西の三潴町まで十数kmに及ぶ八女丘陵の、西端に近い場所に位置し、遺跡は標高20m程の丘陵頂部に立地している。前津中の玉遺跡は、北へ緩やかに傾斜する丘陵頂部平坦面にあり、発掘区内からは14軒の竪穴住居跡が検出された。遺跡は発掘地点より南東方向に広がるものと予想され、奈良時代の大集落が所在した可能性が強い。丘陵の頂部は平坦なため、開墾等によりかなり削平されているものと予想されたが、住居跡壁の遺存状態が良好であるため、あまり削平されていない事が判明した。

発掘調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡14軒と互いに直交する溝2条、住居跡群中央部に南北方向にのびるビット群が検出された。出土遺物は、須恵器、土師器、土錘であり、土器はカマドとその周辺部から出土する割合が大である。



第18図 発掘調査の様子



第19図 前津遺跡遺構配置図 (1/200)

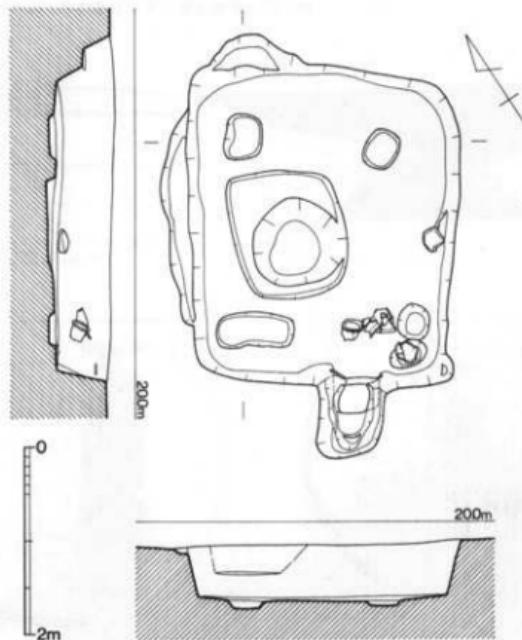
2. 遺構と遺物

a. 壇穴式住居跡

1号住居跡（第20図、図版7・8）

平面の形態は隅丸長方形を呈しており、規模は、長軸3.45m、短軸2.9m、壁高63cmである。主柱穴は4個と思われ、柱穴のプランは円形、長方形を呈し、深さは6cm～9cmと浅いものである。中央部には2段掘りの土壙があり、1段目は長方形、2段目は円形を呈している。

カマドは、南西壁の中央部近くに、外方へ突出させて付設している。カマドは焚口幅50cm、焚口高15cm、奥行き48cmであり、土師器壺が1個のっている。この土器底面と焚口底面までは10cmの空間があるが、支脚は立っておらず、土器はカマドの両袖で支えられた様な状態である。煙道部は焚口最奥部から40度の角度で立ち上っている。カマド前面には多量の灰が堆積しており、甕などの土器が散乱している。



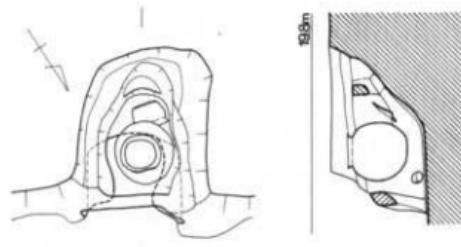
第20図 前津遺跡1号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

須恵器の杯、土師器の高杯、壺、甕が出土した。1、4、6はカマド前面部から、5はカマド内に据えた状態で検出された。2は覆土中、3は中央部土壤から出土した。

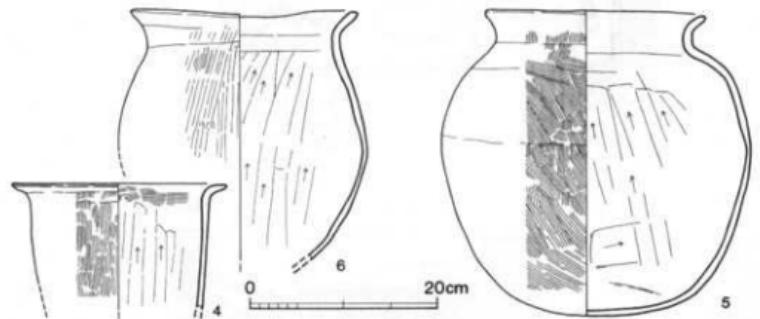
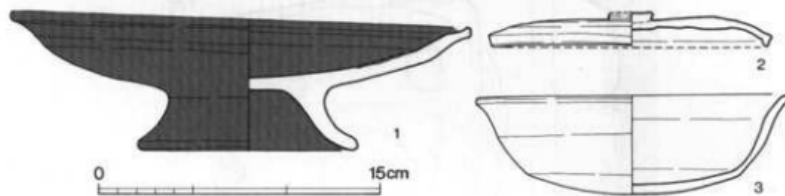
須恵器（第22図、図版12）

杯蓋（2）頂部に扁平な鉗状の據がつく。口縁端部は短く屈曲し、断面は三角形を呈する。口唇部は凹窓する。天井部は回転ヘラ削りする。



198m
0 1m

第21図 前津遺跡1号住居跡カマド実測図（1/30）



第22図 1号住居跡出土土器実測図（1/3, 4~6は1/6）

杯（3）口縁部を外弯させ、内外面にわずかに棱がつく。底部は静止ヘラ削りを施しており、体部との境は棱がつく。

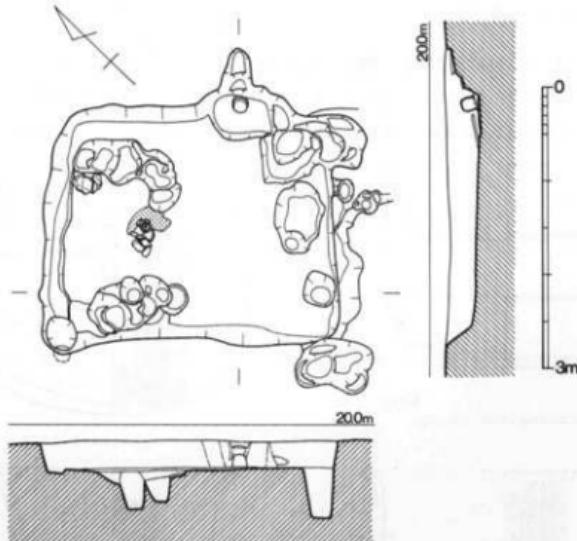
土師器（第22図、図版12）

高杯（1）口縁部をわずかに外反させ、端部は丸い。杯部外面と、脚部外面は丹塗りである。杯部内面は煤が付着している。

壺（5）口頭部は短く外反し、端部は丸い。胴部の中程より上方が最もふくらむ。底部は平底氣味の丸底である。外面は胴部の全面と頭部にかけて刷毛目が入る。内面はヘラ削り調整である。色調は黄褐色を呈しており、胴部に黒斑が入る。カマド内より検出されたもので、上部に甌がのるものと思われる。

甌（4・6）4は大きく外反する口縁部を有し、胴部はやや内すぼみ気味に底部へ移行する。胴部外面は刷毛目が入り、口頭部内面は横方向の刷毛目が入る。胴部内面はヘラ削りする。6は胴部中程にふくらみをもつものであり、底部を欠損する。外面は目の粗い刷毛目が入り、内面はヘラ削りする。

出土した土器は8世紀前半の古い時期に比定され、住居跡の年代は奈良時代前半と考えられる。



第23図 前津遺跡2号住居跡実測図（1/60）

2号住居跡（第23図、図版9）

平面の形態は長方形を呈しており、規模は、長軸3.1m、短軸2.5m、壁高30cmである。主柱穴は4個と思われ、底径20~25cm、深さ22cm~43cmを測る。北西壁近くの床面からは乳灰白の粘土塊が検出された。

カマドは、北東壁のやや東寄りの位置に付設されている。住居跡廐棄の際、袖は破壊しており、さかさに据えた支脚用の小形甕1個が現在するのみである。煙道は、段を有して屋外へのびている。

出土遺物

須恵器の杯身、土師器の甕、瓶が出土した。7・8は住居跡覆土中から、9はカマド内の支脚として無きずのまま、10・11は住居跡北西壁近くから破損した状態で検出された。

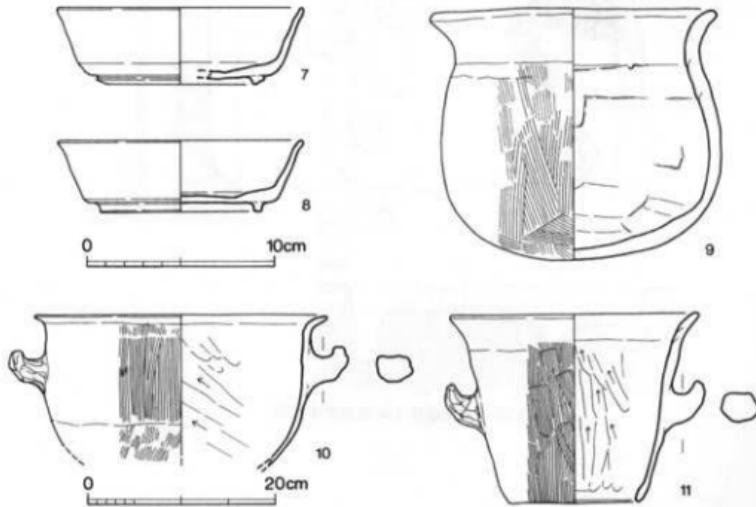
須恵器（第24図、図版12）

杯身（7・8）7は、高台底面の内側のみが地につくもので、8は高台底面の全体が地につく。口縁部をわずかに外反させる。

土師器（第24図、図版12）

甕（9・10）9は小形の甕である。胴部の下方が最もふくらみをもつ丈の低い甕である。底面は丸底ながらもやや平坦面を有している。胴部外面は刷毛目、内面はナデ調整である。

10は把手付き甕である。口頭部は大きく外反し、胴部上位に把手がつく。胴部は丸味をもつ



第24図 2号住居跡出土土器実測図（1/3, 10, 11は1/6）

てつくられている。外面の上半部は刷毛目が入り、下部はヘラ削り調整である。内面はヘラ削りし、頸基部には指頭压痕が残る。

甌 (11) 口縁部をわずかに外反させる。胴部のほぼ中央に把手がつく。外面は刷毛目調整し、内面はヘラ削りを施す。

出土した土器は8世紀前半のやや新しい時期に比定され、住居跡の年代は、奈良時代前半と考えられる。

3号住居跡（図版9）

平面の形態は長方形を呈し、規模は、長軸3.3m、短軸2.8m、壁高36cmである。主柱穴は4個と思われ、深さ22cm～38cmを測る。住居跡中央部には、深さ30cm程の不整形土壙がある。

カマドは、西壁中央部に、外方へ突出させて付設している。煙道部は検出されなかった。

出土遺物

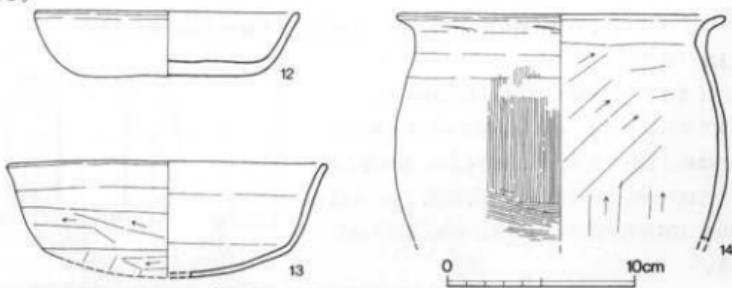
カマド内から土師器杯2個体と甌1個体が出土した。

土師器（第25図、図版12）

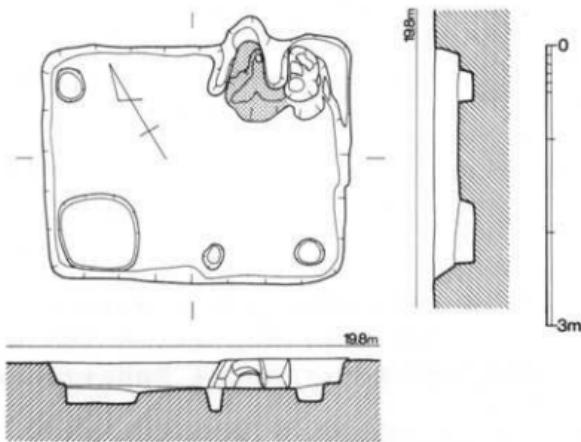
杯 (12・13) 12は底部外面に静止ヘラ削りを施している。13は大形品で深みのある杯である。底部外面は静止ヘラ削りし、体部との境に稜線が入る。口縁部外面に黒斑がつく。

甌 (14) 口縁部を大きく外反させ、内面の胴部との境に稜線が入る。胴部外面の上位はタテ刷毛目が入り、下半部はヨコ刷毛目が入る。内面は斜行するヘラ削り調整である。

出土した土器は8世紀前半の古い時期に比定され、住居跡の年代は、奈良時代前半と考えられる。



第25図 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第26図 前津遺跡4号住居跡実測図(1/60)

4号住居跡（第26図、図版9）

住居跡群のはば中央部から検出された。平面の形態は長方形を呈し、規模は、長軸3.3m、短軸2.5m、壁高28cmである。主柱穴は4個であり、いずれも壁コーナー部分に位置する。このうち東側コーナー部分の柱穴は、カマドの右袖の外側に接している。南西壁の中央部近くに底径15cm、深さ25cmの柱穴があり、棟柱となるものであろうか。

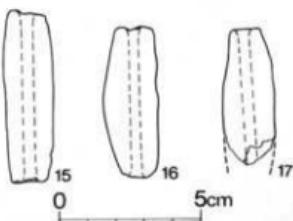
カマドは、北東壁の東寄りに、内側に付設されている。焚口幅40cm、奥行き55cmである。

出土遺物

カマド内から土師器甕の破片が若干出土し、床面からは土鍤が3個体検出された。

土鍤（第27図）

17は端部を一部欠損する。胎土には砂粒をほとんど含まず良好である。色調は褐色ないし黒褐色を呈し、焼成は良好である。15は長さ6.1cm、最大径1.8cm、孔径3.5mm。16は長さ5.4cm、最大径1.9cm、孔径3.5mm。17は現存長4.8cm、最大径1.9cm、孔径4mmである。

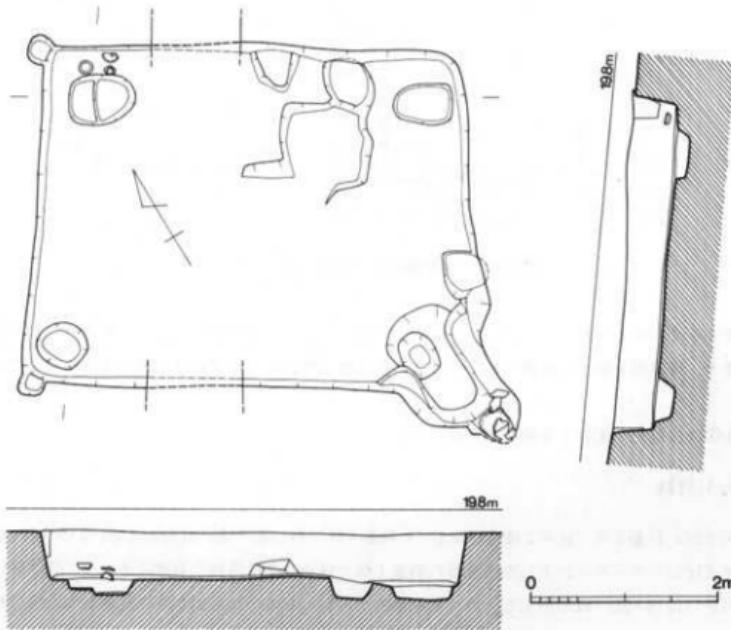


第27図 4号住居跡出土遺物実測図(1/2)

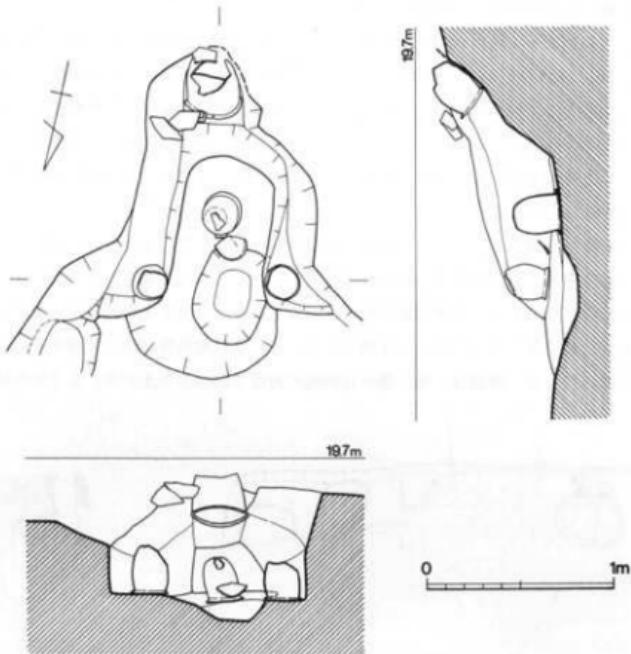
5号住居跡（第28・29図、図版10）

発掘区の南側端部から検出された。平面の形態は台形に近い様な長方形であり、規模は長軸の北東壁4.5m、南西壁5.0m、短軸3.65m、壁高50cmを測り、当該出土住居跡のうち大形のものである。主柱穴は4個と思われるが、南コーナー部分は不明である。北東壁際の中央部床面には幅40~50cm、厚さ10cm程、粘土を貼っている部分が見られ、住居入口と関連性があるものと思われる。この粘土塊の東側には、最初のカマドが付設されたと思われる焼き硬った部分と、前面に焼土が詰った土壤が見られる。

カマドは、新しく南側コーナーに、外方へ突出させて付設している。カマドは、左右袖の先端部に甕を倒立させて各々1個ずつ据え、これをとり込んで粘土で袖を形成している。焚口は幅50cm、奥行き85cmであり、床面は緩やかに上昇している。カマド中央部には、袖内に埋め込んだものと同じ甕を倒立させて据え、支脚としている。焚口直前部は浅く土壤を穿っており、焼土と灰が詰っている。煙道は、焚口奥から55度の角度で25cm立ち上がり、ここからは傾斜を



第28図 前津遺跡5号住居跡実測図（1/60）



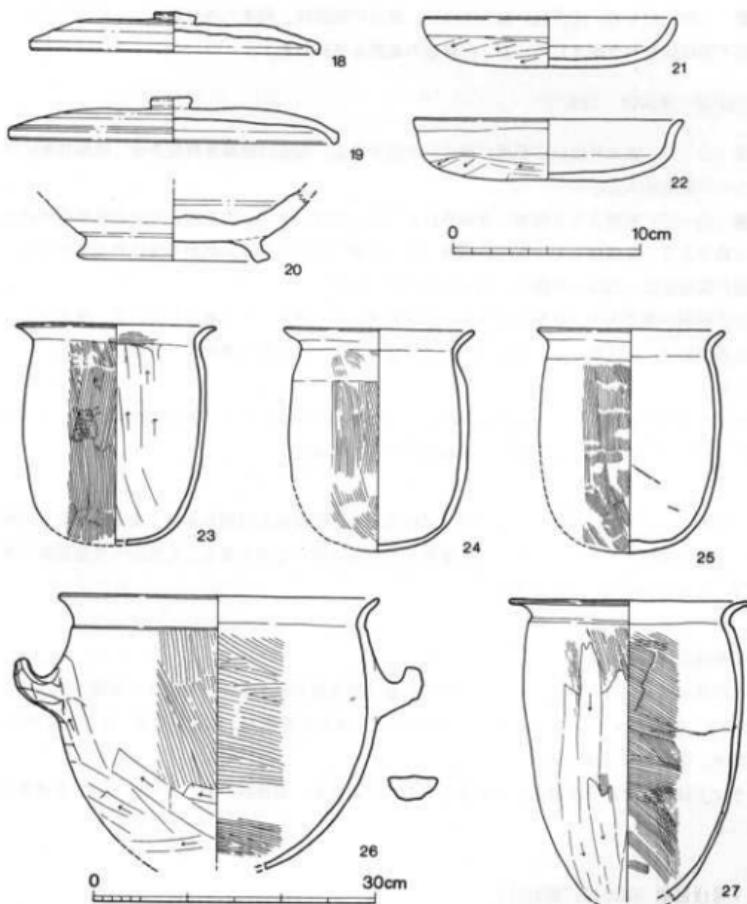
第29図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)

ややゆるやかにして外方へのびる。煙道の出口部分には、底部を打ち欠いて、煙突状にした甕を置き、周辺部を粘土で被覆していた。この煙突甕の煙りの出口周辺は火熱を受け赤変している。

住居跡は壁の一部を1号溝に切られている。

出土遺物

須恵器の杯蓋3個、杯身2個、壺底部、土師器の皿2個、甕5個が出土したが、このうち、住居跡北側コーナーから出土した須恵器の杯蓋1個と杯身2個は現場で盗難にあった。住居跡の床面からは18・20~22が出土し、カマド左袖内から24、右袖内から25が埋め込まれた状態で検出された。23はカマドの支脚として倒立して使用され、26はカマド内から、27は煙道先端部の煙突として用いられていた。



第30図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3, 23~27は1/6)

須恵器 (第30図、図版12)

杯蓋 (18・19) 頂部に鉗状の撮がつき、口縁端部を短く屈曲させる。天井部外面は回転ヘラ削りし、他は横ナデ調整である。

壺 (20) 太くて、丈の長い高台がつく。高台の底面は、内側のみが地につくものである。体部下面是回転ヘラ削りしている。短頸壺の底部と思われる。

土師器（第30図、図版12）

皿 (21・22) 底部外面は広範囲に静止ヘラ削りする。22は口縁部を外反させ、底部外面に×印のヘラ記号が入る。

甌 (23~27) 形態より3種類に分類される。23~25は、カマド内支脚、カマド両袖内埋め込み土器であり、3個体ともほぼ同一規模、同一形態のものである。胴部外面は刷毛目があり、内面の調整法は、23はヘラ削り、24・25はナデである。

27は長胴の甌であり、底部を打ち欠いて円筒状にし、煙突として使用している。胴部外面は刷毛目調整後、ヘラ削りし、内面は刷毛目調整するという通常の調整法とは逆の調整法を行っている。

26は把手付き甌である。口縁部を外反させ、内外面に稜線が入る。胴部は内外面とも目の粗い刷毛目調整であり、外面は刷毛目調整後にヘラ削りする。

須恵器杯蓋は8世紀中葉に比定され、同時出土の土師器皿も口径が小さくなる点から、同時期の所産と判断でき、カマド内出土の甌類もこれらに伴うものである。したがって住居跡の年代は、奈良時代中頃に比定できる。

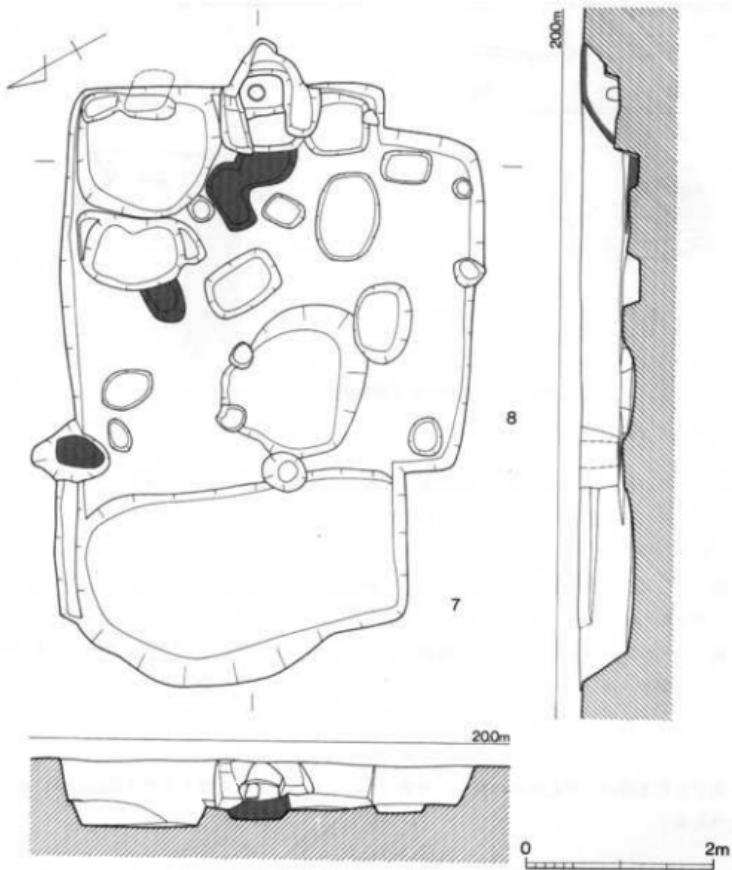
6号住居跡

1号溝に壁を一部切られている。平面の形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸3.6m、短軸2.9m、壁高22cmである。主柱穴は4個であり、いずれも壁際近くに位置する。柱穴は底径20~35cm、深さ10~17cmと浅い。

カマドは北東壁の中央部近くに所在したものであるが、溝掘削の際、そのほとんどを消失している。

7号住居跡（第31図、図版11）

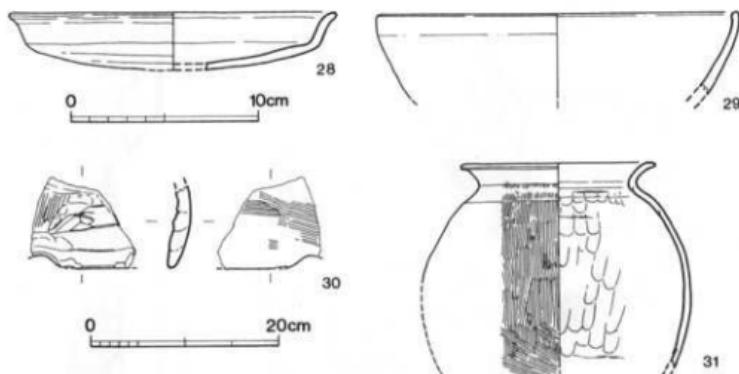
8号住居跡のプラン検出の際、西壁の西側に拡張した様なプランが見られた。平面での切り合い関係を注意深く検討したが、それらしき線は引けなかつたがこの部分から出土した土器は8号住居跡と区別するため、7号住居跡出土遺物としてとりあげた。床面は8号住居跡よりも一段下がるが、これは8号住居跡の柱穴や、土壤底面と同じ深さである。当該部分からは、切り合い関係をもつた1軒の住居跡と考えられる様な柱穴の存在もみられず、又、北壁は8号住居跡とは直線上にある点から、8号住居跡の拡張部分と判断し、7号住居跡を欠番とする。



第31号 7・8号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

拡張部の覆土中から4個体出土した。須恵器の椀、土師器の皿、壺、カマド形土器である。



第32図 7号住居跡出土土器実測図 (1/3, 30・31は 1/6)

須恵器 (第32図)

椀 (29) 口縁部を直立させる。内外面とも横ナデ調整である。胎土に砂粒をほとんど含まず良好である。青灰色を呈し、焼成は良好である。

土師器 (第32図、図版13)

皿 (28) 底部外面は静止ヘラ削りであり、底体部との境に稜線が入る。口縁部を外反する。

カマド形土器 (30) 小片のため詳細は不明である。底部分か、底部かと思われる。

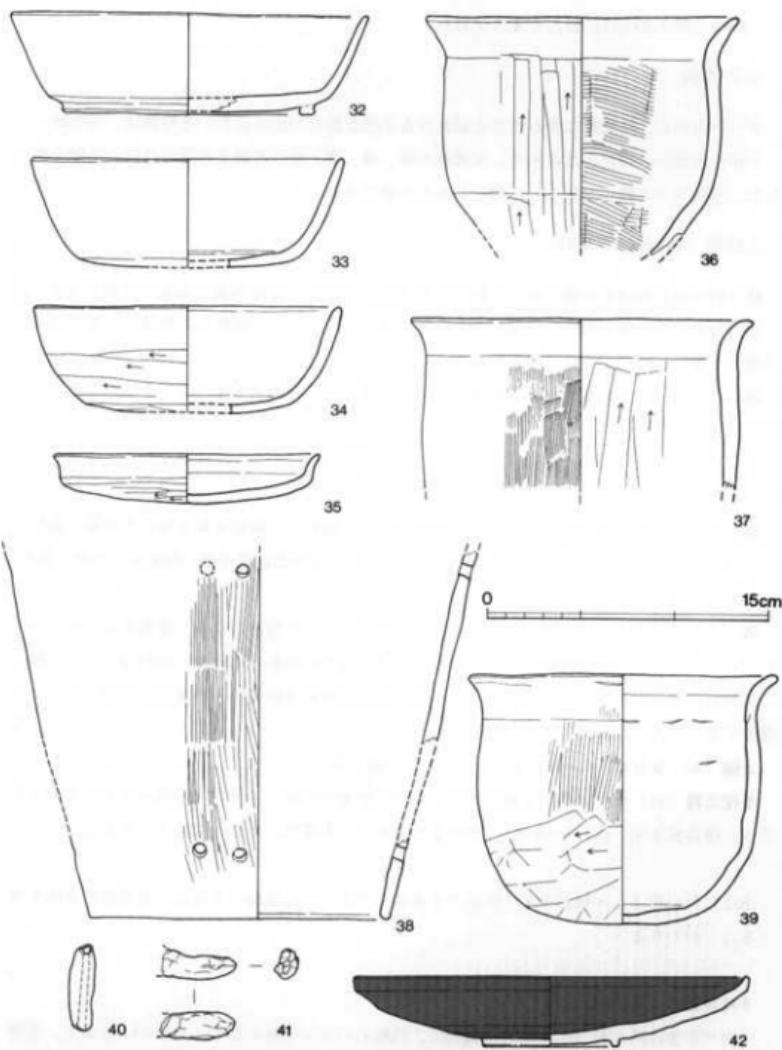
壺 (31) 口縁部を外反し、基部に稜線が入る。胴部外面は刷毛目があり、内面は指頭圧痕が入る。口縁部内面は、横方向の刷毛目が入る。

出土した土器は8世紀前半の新しい時期に比定でき、いずれも覆土中出土品のため、流入品と考える。

8号住居跡 (第31図、図版11)

西壁に突出した部分は、別の住居跡との切り合いとも考えられたが、この部分を当該住居の拡張部と判断した。住居跡内には多数のピットが検出されたが、主柱穴は住居跡コーナー近くの4個と思われる。拡張部を除いた平面の形態は方形を呈し、規模は $4.2m \times 4.4m$ である。

カマドは東壁の中央部に位置し、袖の一部と煙り出しは外方へ突出させている。焚口は、幅40cm、奥行き75cmであり、焚口直前部には、床面を10cm程掘りくぼめた土壇があり、焼土や灰が詰っている。カマド中央部には支脚として小形甕を倒立させている。左袖の左脇には、径1.3



第33図 8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

～1.55mで深さ30cm程の屋内貯蔵穴がある。

出土遺物

カマド内から、祭祀用に使われたと思われる手捏土器40が出土した。その他は、住居跡のピット中や床面からの出土品であり、土師器の杯、皿、甕、瓶、丹塗りの高台付皿、土鍤を検出した。39はカマド内の支脚として用いられた土器である。

土師器（第33図、図版13）

杯（32～34）32は丈の低い高台を貼付した大形品である。底部外面は回転ヘラ削りする。

33・34はやや丸味を帯びた体部であり、33は底部外面に、34は底部から体部中位まで静止ヘラ削りを施している。外面には黒斑がつく。

皿（35・42）35は底部外面を広範囲に静止ヘラ削りする。口縁部を外反させており、体部と底部の境に稜線が入る。

42は内外面とも丹塗りである。丈の低い小さな高台を貼付する。口縁部は短く、直立させ、内外面に棱がつく。

甕（36・37・39）36は小形品であり、胴部に比して長めの口縁部を鋭く外反させる。調整法は、外面はヘラ削り、内面は、横方向刷毛目である。37は外面は刷毛目、内面はヘラ削り調整。39は外面に刷毛目を入れ、下半部はヘラ削りする。

瓶（38）下半部の破片である。胴部は直線的にすぼまって底部となる。底部から3cmと18cmの位置に各々2個の円孔が焼成後に穿たれている。各々の円孔の間隔は1.5cmであり、この部分に割れ目があるため、補修用の紐通し穴と思われる。外面は刷毛目、内面はヘラ削り上をナデ調整する。外面には黒斑がついている。

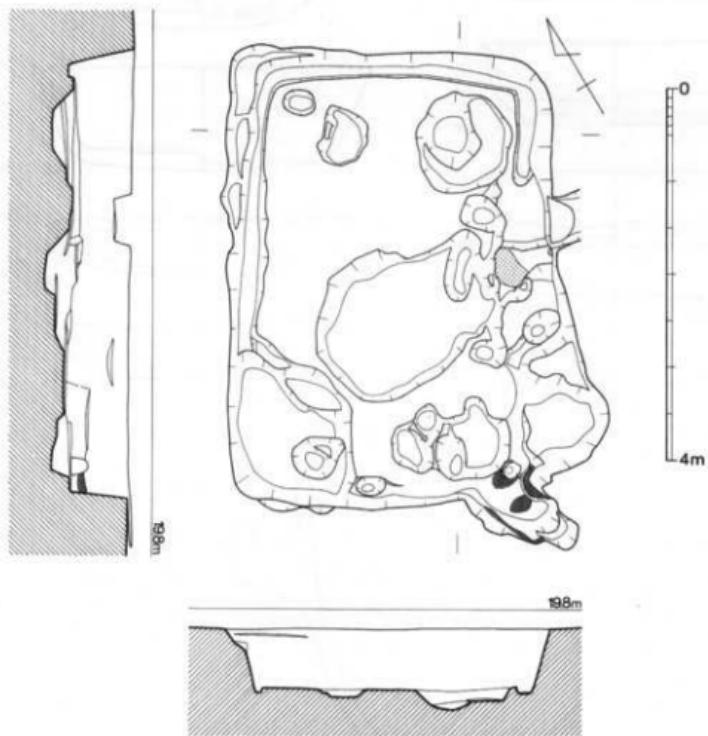
土鍤（40）全長4.6cm、最大径1.3cm、孔径3.5mmである。

手捏土器（41）カマド内出土品であり、カマド祭祀のため、カマド内に埋め込んだものであろう。現存長4cm、幅1.2cmを測り、柄のようであり、先端部に杓がつくものと思える。

出土した土器は、8世紀中葉に比定できるものであり、住居跡の年代は、奈良時代中頃を考えることができる。

9号住居跡（第34図）

平面の形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸4.87m、短軸3.55m、壁高60cmである。北壁と西壁の接際の床面には、深さ6～10cmの壁溝が巡る。主柱穴は4個と思われるがカマド付近は特定できない。住居跡中央部には隅丸長方形の浅い土壌がある。



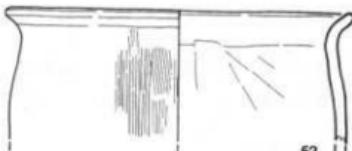
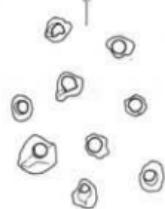
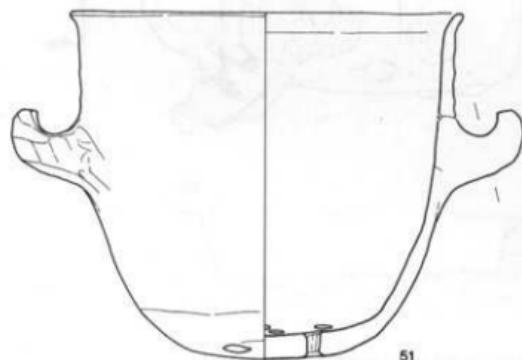
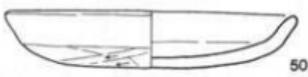
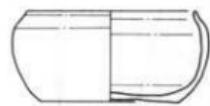
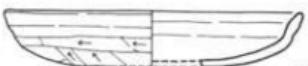
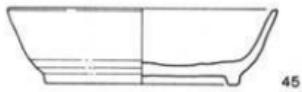
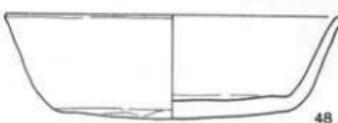
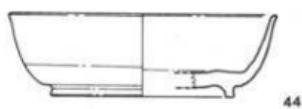
第34図 前津遺跡 9号住居跡実測図（1/60）

カマドは5号住居跡と同じく、南側コーナー部分に外方へ突出させて付設している。住居を廃棄する際、カマド上面を破壊している。

出土遺物

須恵器の杯蓋、身、壺、土師器の杯、皿、瓶、甕が出土した。51はカマド内出土品であり、他のものは住居跡の覆土中出土である。

須恵器（第35図、図版13）



第35図 9号住居跡出土土器実測図 (1/3)

杯蓋 (43) 口縁部を屈曲させ、断面は三角形を呈する。口唇部を凹窓させる。頂部に鉗状の握がつき、周辺部は回転ヘラ削りする。

杯身 (44・45) 44は口縁部をわずかに外反させる。45は底部の外側に高台がつき、体部との境が明瞭でない。

壺 (46) 口縁部は内傾し、端部はわずかに立ち上がる。底部は回転ヘラ削りし、平坦である。底部と体部の境は鋭く棱がつく。体部内外面は横ナデ調整である。

土師器 (第35図、図版13・14)

杯 (47・48) 47は、底部から体部にかけて丸味をもち、下半部は静止ヘラ削りする。48は底部外面を静止ヘラ削りし、この部分に「祝」のヘラ書き文字が入る。

皿 (49・50) ほぼ同大のものあり、体部下半部は静止ヘラ削りする。49は体部に凹線が入り、口縁部を肥厚させている。

瓶 (51) 把手付き甕の底部に、焼成後、内側から外側に向って9個の円孔を穿って瓶としている。口縁部は短く、外反させる。丸底の底部外面は静止ヘラ削りする。胴部は外面ともナデによる調整である。円孔は径7mm前後のものである。

甕 (52) 口縁部を短く外反させる。胴部外面は刷毛目、内面はナデ調整である。

出土した土器は、8世紀前半の新しい時期に比定されるものであり、住居跡の年代は、奈良時代前半を考えることができる。

10号住居跡 (第36図、図版11)

平面の形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸3.75m、短軸2.85m、壁高58cmである。主柱穴は4個と思われるが、2個の柱穴は浅い土壤状のものである。住居跡の中央部には方形状を呈した、深さ25cmの土壤がある。

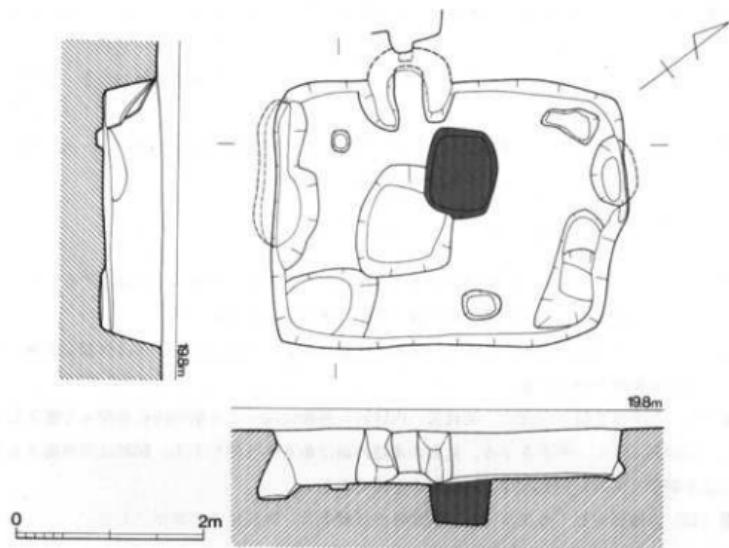
カマドは、北西壁のやや西に寄った位置に付設されており、袖の一部と煙道部を外方へ突出させている。煙道部は13号住居跡の煙道部に切られている。

出土遺物

いずれも住居跡覆土中からの出土品である。出土した土器は、須恵器の長頸壺、土師器の杯身、皿、高杯、鉢、甕、カマド形土器である。

須恵器 (第37図、図版14)

長頸壺 (57) 口縁部は外反し、端部上面は平坦である。頭部内外面は横ナデの凹凸が著しい。



第36図 前津遺跡10号住居跡実測図 (1 / 60)

内外面ともに自然釉が付着している。

土師器 (第37図、図版14)

杯 (53) 幅が広く、丈の低い高台がつく。底部と体部の境は角張り、境部の直上部に静止ヘラ削りが入る。体部は直線的に外反して、口縁となる。

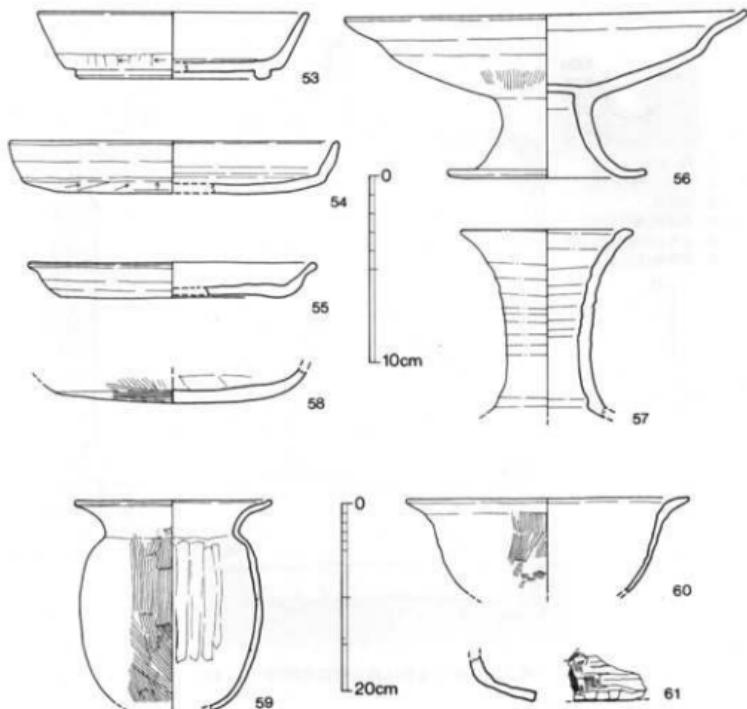
皿 (54・55) 54は底部外面に静止ヘラ削りを施すが、55はナデである。55は体部外面を凹曲させる。

高杯 (56) 杯部は、口縁部近くで一度くびれて再び外反する。杯部下半は刷毛目調整後、ヘラミガキする。外面は丹塗りの痕跡がみられる。

甌 (58・59) 58は底部のみである。59は、丈が長くて、大きく外反する口縁部を有し、胴部中央が張る。外面は目の粗い刷毛目があり、内面はタテ方向に布状のものを用いたナデである。

鉢 (60) 口縁部は外反度が強く、器壁も厚い。外面は刷毛目調整し、内面はナデである。

カマド形土器 (61) 小片のため詳しくは不明である。底の一部かと思われる。



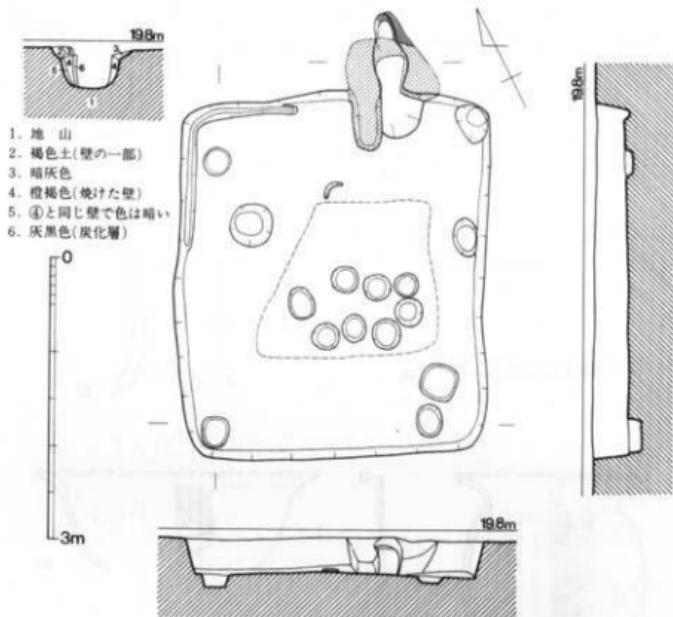
第37図 10号住居跡出土土器実測図（1/3, 59~61は 1/6）

出土した土器は、やや新しい形態の55の土器を包含しているが、これを除く、他の土器はいずれもこれよりは先行するものであり、8世紀前半の新しい時期に比定される。したがって、住居跡の年代は奈良時代前半と考えられる。

11号住居跡（第38図、図版11）

平面の形態は長方形を呈し、規模は、長軸3.95m、短軸3.3m、壁高38cmである。主柱穴は4個であり、いずれも壁コーナー近くに設けられている。柱穴は底径20~25cm、深さ7~12cmと浅い。住居跡中央部は広範囲に床が硬く踏みしめられており、この部分に径25~30cm、深さ3~5cmの凹みが8個みられ、腰などを据えていたものと思われる。

カマドは北壁のやや東寄りの位置に付設され、袖の一部と煙道部は外方へ突出している。



第38図 前津遺跡11号住居跡実測図（1/60）

12号住居跡（第39図、図版II）

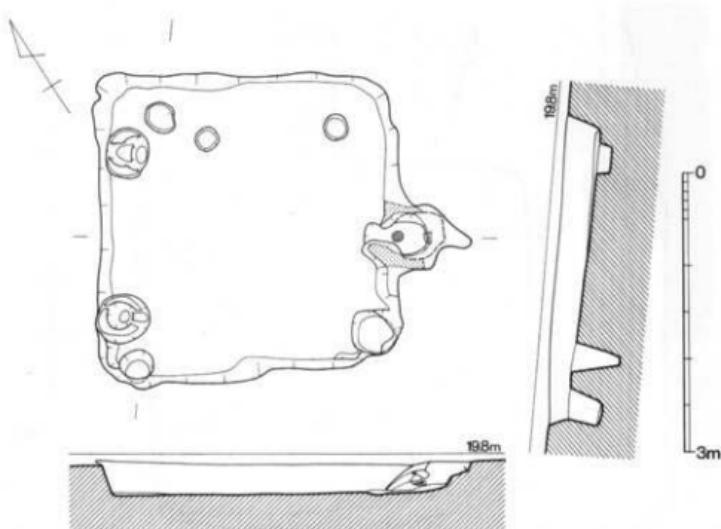
1号溝により壁の一部を切られている。平面の形態は方形を呈しており、規模は、一辺3.15m×3.2m、壁高33cmである。主柱穴は4個であるが、柱穴は台形状の配置となる。柱穴は底径23~40cm、深さ12~32cmである。

カマドは、南東壁の中央部に外方へ突出して付設する。カマドの袖は青灰色粘土で構築されている。

13号住居跡（第40図）

発掘区の西側端部に位置する。平面の形態は方形を呈しており、南北軸3.8m、東西軸4.15m、壁高45cmである。主柱穴は4個であり、柱穴の深さは4~28cmである。住居跡中央部の床は2.05×2.2mの範囲が、ガチガチに硬くしまっている。

カマドは、最初、東壁中央部に付設されたが、新たに、北壁中央部に外方へ突出させて付設



第39図 前津遺跡12号住居跡実測図（1/60）

している。カマドの袖は灰白色粘土で構築されており、粘土は、煙道部にも薄く敷かれている。焚口は、幅35cm、奥行き55cmである。煙道は幅15cmで、長さ1.15mまで確認された。

出土遺物

いずれも住居跡覆土中からの出土品である。須恵器の甕、皿、土師器の杯、皿、鉢、高杯が検出された。62はピット内出土品である。

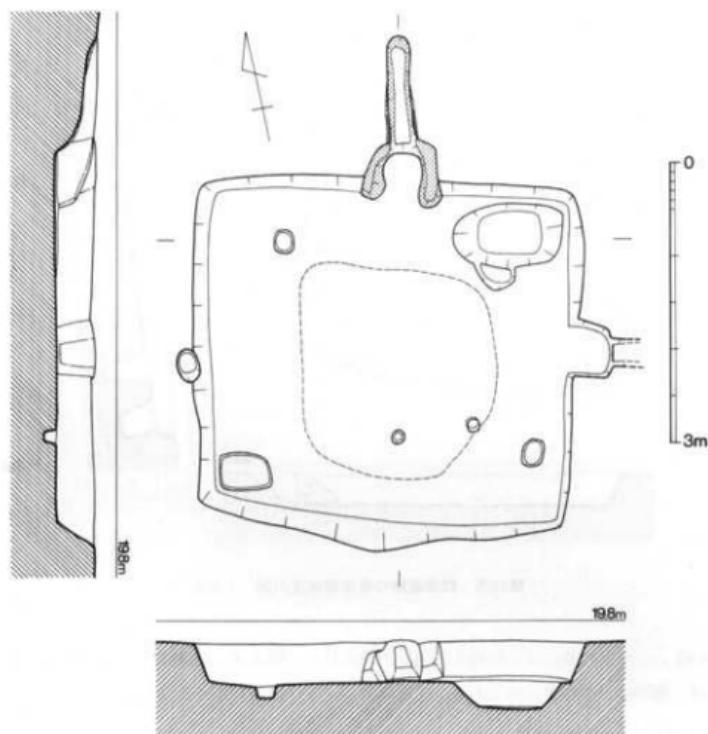
須恵器（第41図、図版14）

皿（62）底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。

甕（69）口唇部は平坦面を有する。胴部外面は平行叩き後カキ目調整し、内面は同心円叩きが入る。

土師器（第41図、図版14）

杯（63）底部外面はヘラ切り離し後、未調整である。底部と体部の境は鋭く稜がつく。



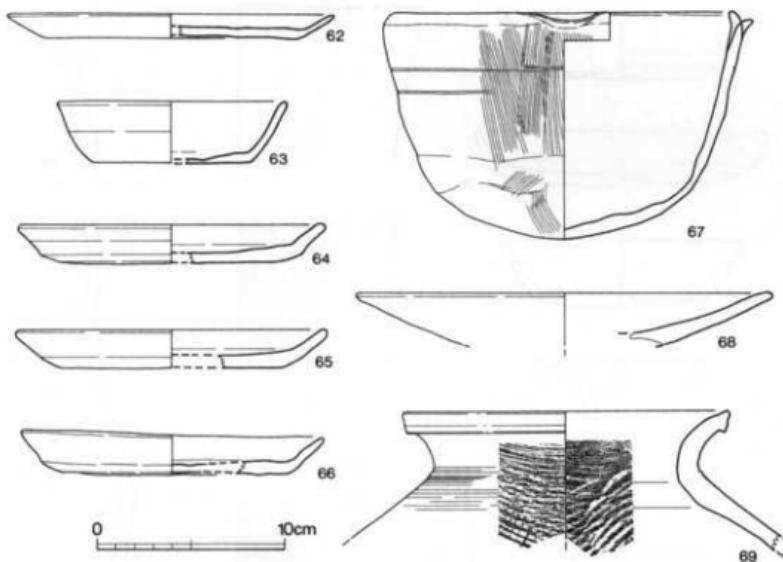
第40図 前津遺跡13号住居跡実測図（1/60）

皿 (64～66) 3個体とも口径、器高はほぼ同じ大きさである。底部外面は、64は回転ヘラ削りしているが、他は器表の磨滅のため不明である。

鉢 (67) 片口の鉢である。体部は深く、底部はややとがり気味の丸底である。体部上面に全周しない2条の沈線が入る。外面は刷毛目調整している。外面の2ヵ所に黒斑がみられる。

高杯 (68) 直線的に外反する杯部のみ遺存する。器表の磨滅により調整法は不明である。

出土した土器は、8世紀中葉に比定できるが、当該住居跡出土のうちで、最も新しい形態の土器であり、5号、8号住居跡よりは新しいと思われる。住居跡の年代は、奈良時代中葉に比定できる。



第41図 13号住居跡出土土器実測図 (1/3)

b. ピット群

100余個に及ぶピットが検出された。このうち住居跡群の中央部、南北方向にピット群が集中している。ピットの形態は円形が大半であり、長方形状のものが若干みられる。ピットは深さは10~50cmのものである。住居跡中央部の南北方向に集中したもの一部は、柵列になる可能性をもつ。

出土遺物

ピット内からは、土師器の杯、皿、甕、瓶、土錘が出土したが、量は少ない。

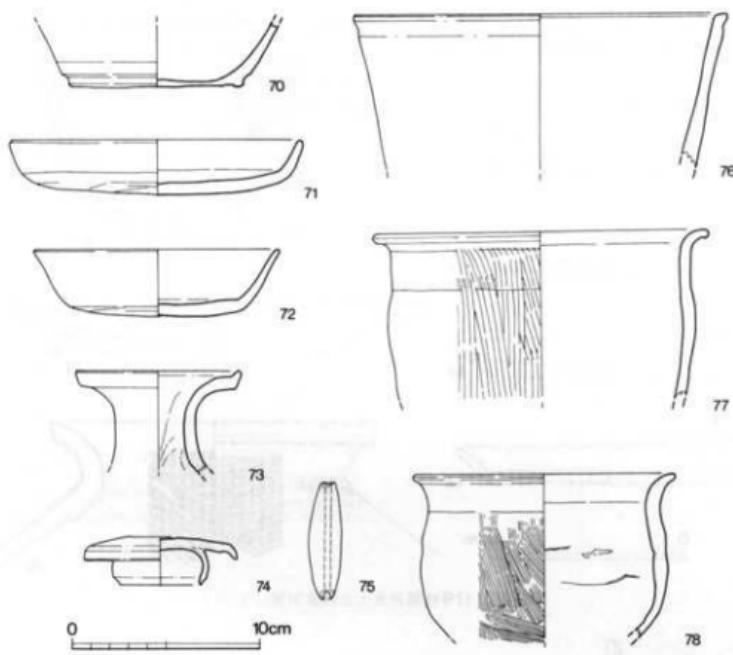
土師器 (第42図、図版14)

杯身 (70) 丈の低い高台が、底部と体部の境付近につき、境部が不明瞭となる。

皿 (71) 底部外面を広範囲に静止ヘラ削りしている。内底部は木口によるナデ圧痕が残る。

甕 (76) 小片のため、判断に苦しむが、甕と思われる。口縁端部上面は平坦である。

瓶 (77・78) 77は短い口縁部の外反度は大である。胴部外面は、目の粗い刷毛目が入り、内



第42図 ピット・溝出土土器実測図 (1/3)

面はナデている。78は小形の甕である。胴部に比して、底部の器壁は薄い。外面は目の細かい刷毛目が入り、内面はナデている。粘土の接合痕が残っている。

土錐 (75) 全長6.3cm、最大径1.8cm、孔径3mmのもので、中央部がふくらんでいる。

ピット内出土の土器71は、8世紀前半の新しい時期に、70は8世紀後半に比定できるものである。ピット出土品中には70の如く、住居跡の時期よりも後出するものも含まれるが、ピット群の大半は、住居跡群とはほぼ同時期所産のものと思われる。ピット群は掘立柱建物としてのまとまりはみられず、柵、杭等の柱穴と思われる。

c. 溝

南北に走向する1号溝と、これに斜行する東西方向の2号溝が検出された。溝はいずれも住

居跡群を切って造られており、後出するものである。

1号溝は2段になり、上部幅2mを測る。2段目は、幅80cm程度であり、断面形はU字形を呈する。1段目からの深さ80cmを測る。丘陵を横切って、北側へ流れ込むものである。

2号溝は幅40~50cm、深さ25cmのものであり、1号溝へ注ぎ込む様な勾配である。

出土遺物

2号溝からは、73の須恵器壺の口頸部が、2号溝の西側延長からは74の蓋が出土した。

須恵器（第42図、図版14）

壺（73）頸部であり、口縁部内面に段がつく。内面にしばり痕を残す。

蓋（74）口縁端部を屈曲させ、内弯気味で丈の長い身受けのかえりを有する。天井部外面はナデ、他は横ナデ調整である。色調は灰白色を呈し、焼成はやや甘い。胎土は精選されていて良好である。

d. 土壙（第19図）

不整形及び、橢円形を呈する土壙が4基検出された。

1号土壙は5号住居跡に切られたものであり、黒色土が詰っていた。長さ2.3m、深さ36cmである。

2号土壙は、長さ2.3m×1.4m、深さ50cmである。

3号土壙は、長さ3.3m×3m、深さ34cmであり、底面に深さ20cmのピットを穿っている。

4号土壙は、長さ3m×2.5m、深さ38cmである。

いずれの土壙内からも遺物は出土していないため年代は不詳であるが、埋土は住居跡のそれと異なっており、1基は住居跡に切られているため、これよりは古い年代のものと思える。土壙の平面形や断面の形態から墓地遺構とは思われない。

VI. おわりに

1. 藏数東野屋敷遺跡の調査

小範囲の調査であったが、丘陵尾根筋に並走して営まれた弥生時代中期前半の甕棺7基と、同時代と思われる土壙墓1基が検出された。以前にも、当該地の南西40~50mの所から甕棺が検出されており、かなり広範囲に墓地群は括がっているものと予想される。

昭和59年に瀬高町坂田の権現塚北遺跡の調査で出土した甕棺の編年と上・下棺のセット関係で矛盾するものは見られず、土器の形態では筑紫平野出土品とそっくりの甕棺1基を除くすべて、権現塚北遺跡出土品と共に通の特徴を有した南筑後タイプの甕棺であった。

2. 前津中の玉遺跡の調査

①住居跡の形態と規模について

住居跡の平面形態は、すべて四角形であり、これを細分すると、長方形プランのもの9軒、方形プランのもの3軒に分かれる。

住居跡の規模をみると、長方形プランのうち最大のものは9号住居跡であり、一辺4.87m×3.55mを測り、床面積は17.3m²である。最小のものは2号住居跡であり、一辺3.1m×2.5mを測り、床面積は7.75m²である。方形プランで最大のものは8号住居跡であり、一辺4.2m×4.4mで、床面積は18.48m²である。最小規模のものは12号住居跡であり、一辺3.15m×3.2mで、床面積は10.1m²を測る。この様に、面積においては、最大18.48m²から、最小7.75m²のものがみられ、その差は2倍強もある。

②カマドについて

カマドはすべての住居跡に付設されている。このうち、8世紀中頃の5・8・13号住居跡では、1軒の住居跡内に、2基のカマドが見られ、一方は何らかの理由で取り壊され、新たにカマドを付設しているようである。

カマドの付設場所は、通常、風向き等の関係により一定の指向性をもつ傾向がみられるが、当該遺跡出土のカマド付設場所の指向は一定せず、住居跡の北側に付設したもの5基、南側3基、東側2基、西側2基である。年代との関連性は特に認められない。カマドの付設の位置は、本体の半分、もしくは全部を住居壁の外側へ突出させており、住居跡の壁の中央部に付設した

もの4基、中央から、左・右どちらかに片寄って付設したもの6基、二辺のコーナーに付設したもの2基の3タイプに分類される。1号・5号住居跡のカマドは遺存状態が特に良好であり、カマドの構造を知る上で貴重な資料である。カマドは粘土を用いて、左・右袖を構築しており、中には5号住居跡のカマドの如く、両袖の前面部に土師器の小形甕を各1個、倒立させて埋め込み、構造の強化をはかったものもみられる。両袖の上部には鴨居状に粘土をわたして、高さ25cm程の焚口の空間部を形成する。1・5号カマドでは、焚口部の幅50cm、奥行き48~85cmで、底面は奥へ向って若干上昇させる。この最奥部から煙道部がたちあがり、斜め上方へ1~2段を有してのびる。煙道部先端には、甕の底部を打ち欠いて円筒状としたものを埋め込んで煙り出しとしたものの1基がみられたが、他のカマドについても、先端部には、これと似た様な施設をもうけたことが類推される。

カマド内には甕形土器を倒立させて支脚としたもの3基がみられたが、石製の支脚は検出されなかった。

カマドの祭祀に関しては、これに関係すると思われる手捏土器が1個、8号住居跡のカマドから検出されただけで、詳しくは分からぬ。

③住居跡の年代について

1~13号住居跡のうち、7号住居跡は欠番のため、調査したのは12軒である。これらの住居跡はいずれも、奈良時代前半~中期にかけてのものであり、4期に分けられる。I期は8世紀前半の古い時期に比定される1号、3号住居跡である。II期は8世紀前半の新しい時期に比定される2号、9号、10号住居跡である。III期は8世紀中頃の5号、8号住居跡であり、最後に8世紀中頃のやや新しい時期に比定される13号住居跡が出現する。

これら、住居跡の築造年代と規模を比較すると、I・II期に属する8世紀前半代の5軒の住居跡の床面積は10.76m²と狭く、III・IV期に属する8世紀中頃の3軒の住居跡床面積は16.83m²と広くなる傾向がある。この傾向をもとに年代の定かでない住居の時期を考えてみると4号、6号、12号住居跡はI~II期に属し、11号は、III~IV期に属すると考えられる。

この様にみてくると、8世紀前半代の住居跡8軒は発掘区の中心部分に位置し、8世紀中頃の住居跡は、これをとりまく様に外方に位置する傾向がみられる。

④ヘラ書き土器について

8世紀前半の新しい時期に比定される9号住居跡内から、土師器杯(48)が出土したが、この土器の底部外面の中央部には、ヘラ書きによる「祝」の1文字が刻されていた。

「祝」の字は楷書で、きちんと書かれており、吉祥句として用いられたものかも知れない。一方、古代より神宮の補職名に、祝(はぶり)という名称がみられるため、職名を書いたとも

受けとれる。職名だとすれば、神職に従事した者、もしくはそれと何らかの関連性を有した者の住居跡とも考えられ、奈良時代中頃の神社の形態、所在場所について、興味を覚える。

奈良時代の神社というものは、現在の神社の様な形態を有していたとは思ひがたく、古代の人々は神のよりしろとしての森や、岩などを神社とみたて、自然の神々を、恐れ、崇拝したことなどが想像される。したがって、集落と神社とは相互に緊密な関連性をもつものと思われる。

⑤住まいについて

当該遺跡からは、奈良時代前半～中頃にかけて的一般庶民の住まいと言える竪穴式住居跡が13軒検出され、周辺部にはまだかなりの住居跡が存在することが予想され、大きな集落を形成していたことがうかがえた。これらの住居跡は、1辺が3m～4m強の小形のものであり、床面積は7.8～18.5m²と言った狭いものであり、中でも、10m²程度のものが半数をしめる。一般に、奈良時代の竪穴式住居は小形であるが、柱の建った部分を除くと、その生活空間面積はさらに狭くなり、一体、何人程の人が、どの様な生活をしていたのであろうか。

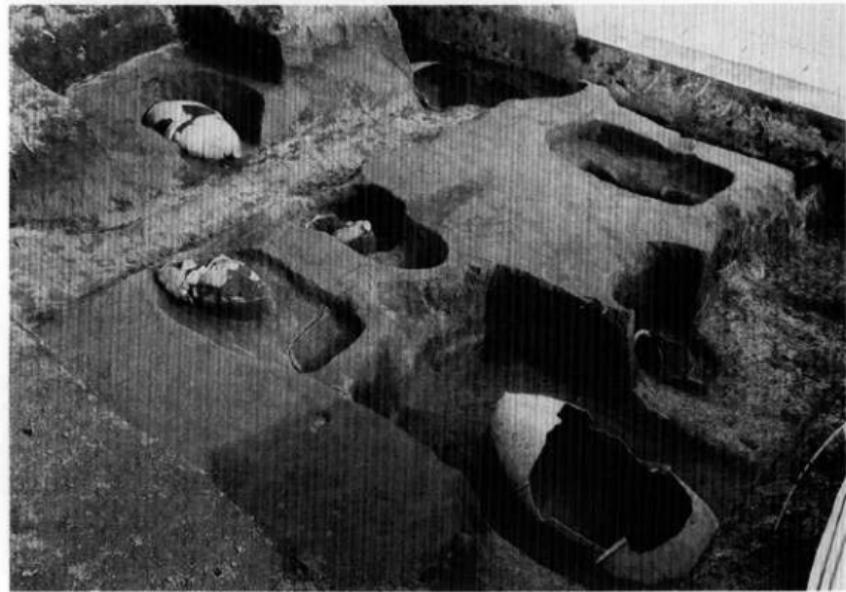
この頃の生活の様子を歌ったものに、大宰府政府の役人として赴任したこともある、有名な山上憶良の「貧窮問答歌」が万葉集におさめられている。「……伏謙の 開闢の内に 真土に
藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 羅へ吟ひ 龍には
火氣ふき立てず 罐には 蜘蛛の巣かきて……」とある。これは、地面に伏せた様に屋根が低くて、斜めに傾いて今にも倒れてしまいそうな粗末な家の中に、床に藁を直接敷いている。父母は、自分の頭の方に、妻や子供は足もとの位置に丸くなってしまい横になり、寒さや、飢えにふるえ、カマドには、飯を焚くための火の気もなく、窓には蜘蛛の巣が張っている……。と当時の竪穴式住居の様子や、そこに住む人達の貧しい生活の様子がうたわれている。この歌から、1軒の家には、父母と、夫婦、子供が同居していて、構成人数は5～6名程であることがうかがわれるが、これが一般的な、居住構成であったと思われる。

註 ヘラ書き土器については、九州歴史資料館の倉住靖彦氏に読解して頂いた。

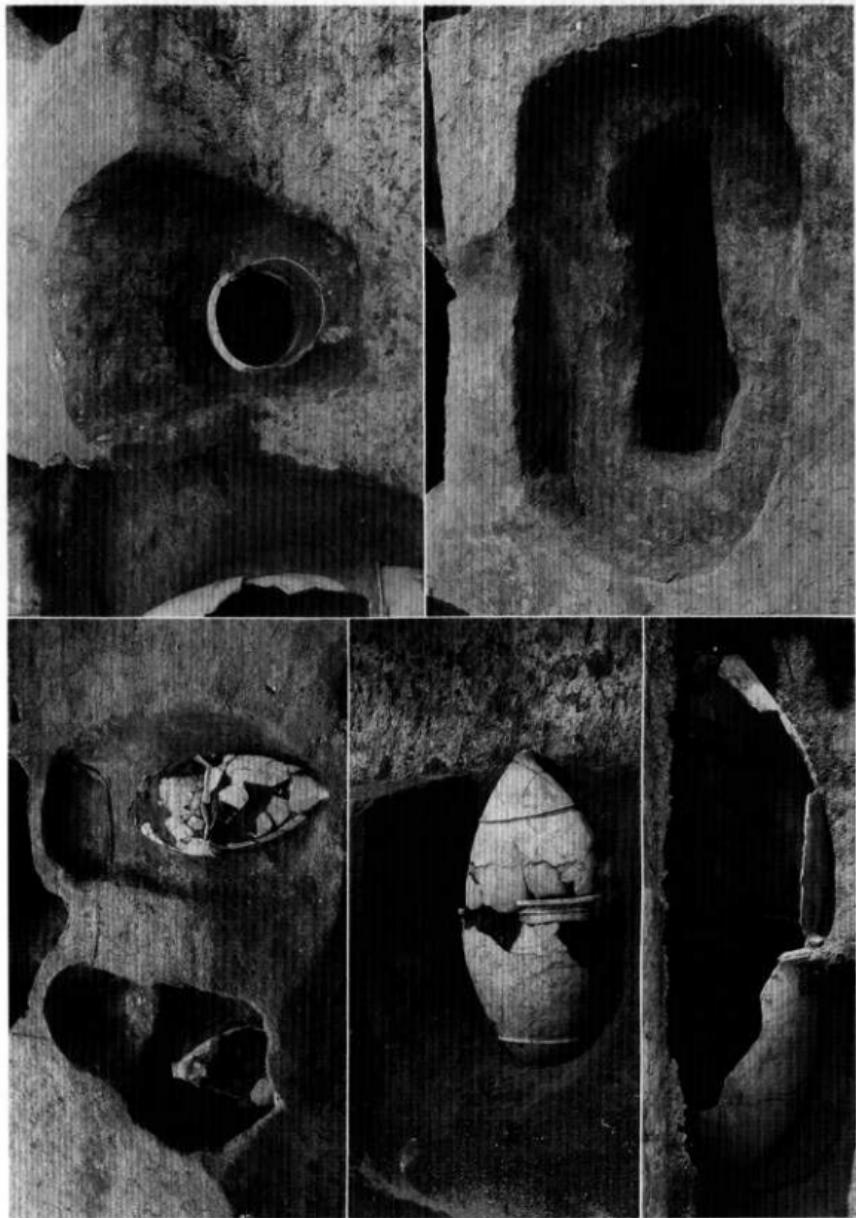
図 版



藏敷東野屋敷遺跡全景（東から）

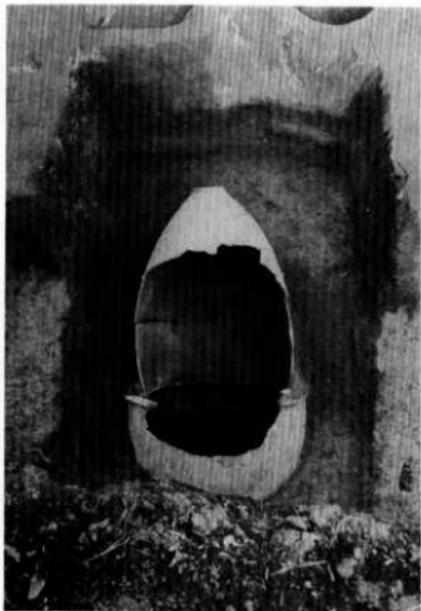


藏敷東野屋敷遺跡全景（西から）



右上 3号壺棺墓、下 1号土塚墓

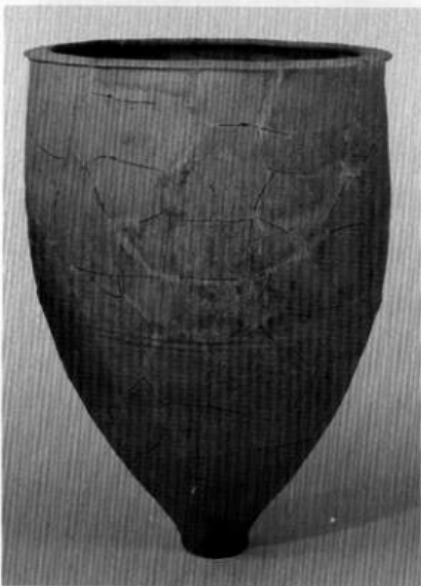
左上 1・4号壺棺墓、中 5号壺棺墓、下 6号壺棺墓



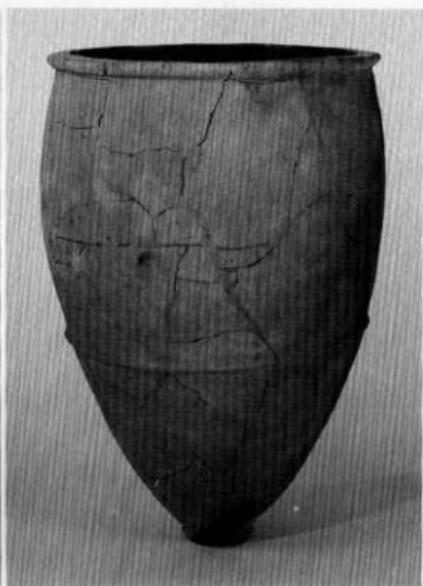
2号漆棺墓出土状态



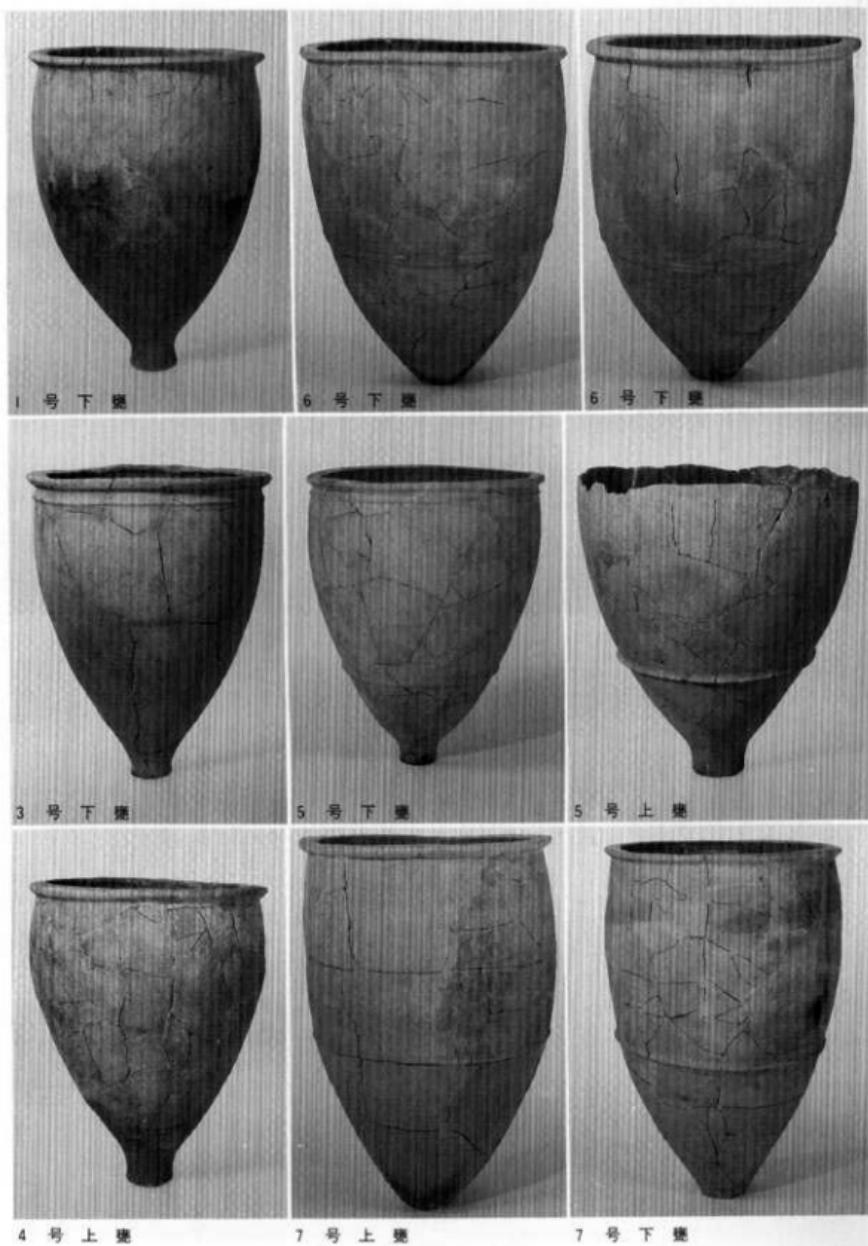
7号漆棺墓出土状态



2号下漆

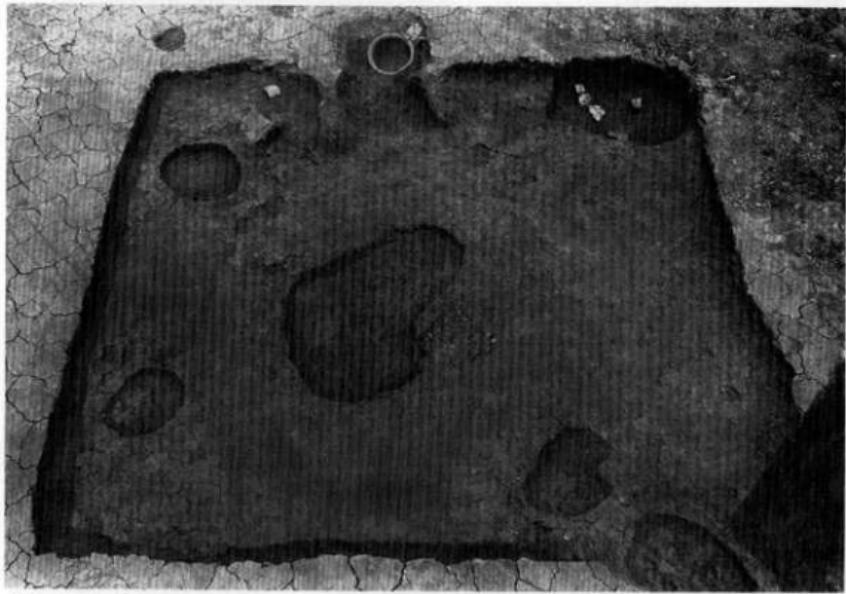


2号上漆

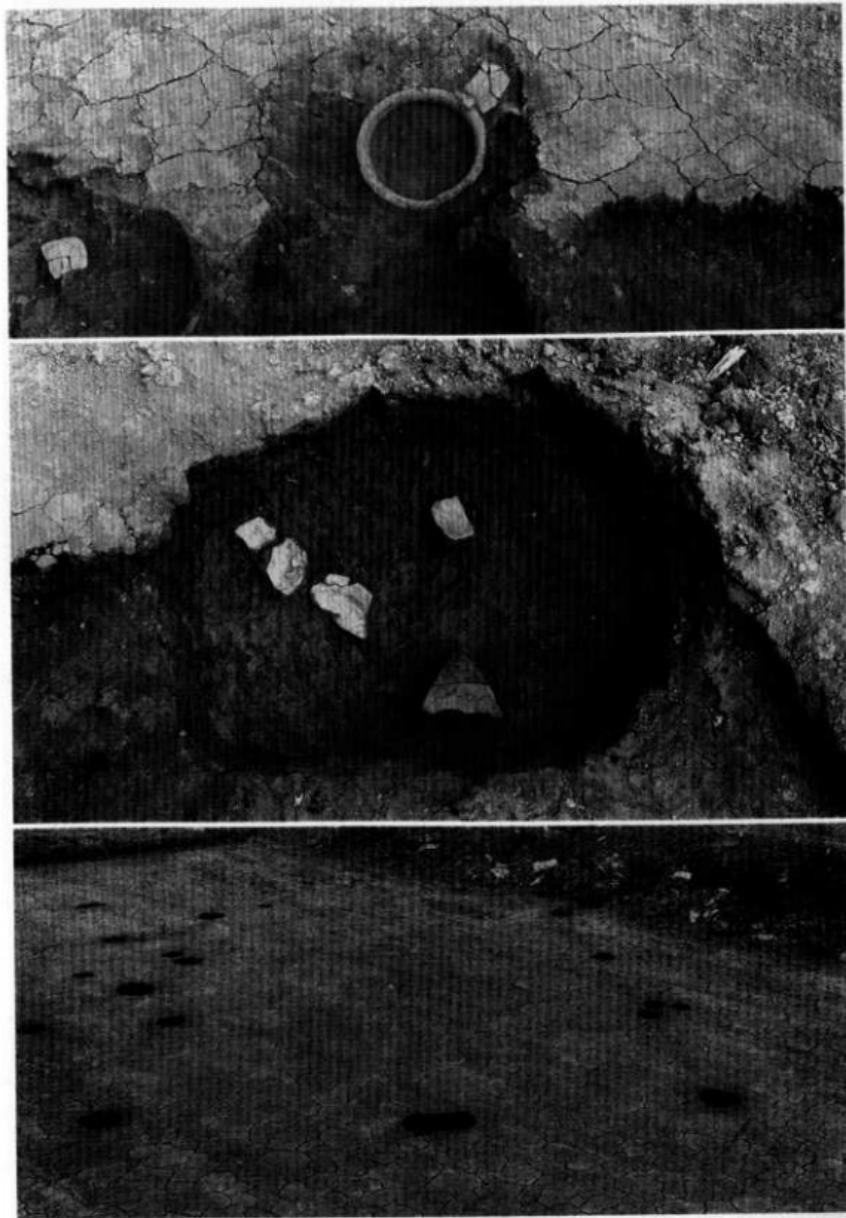




井原口遺跡全景



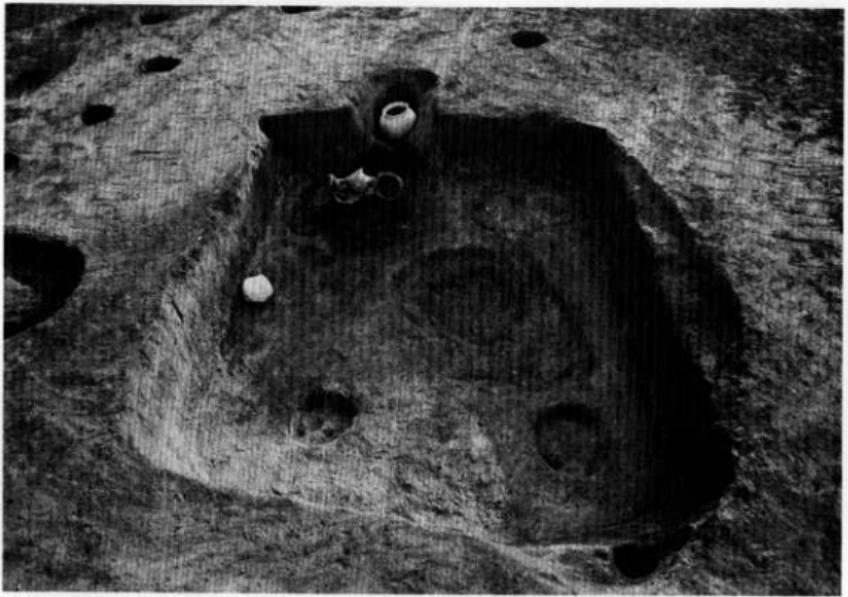
井原口遺跡Ⅰ号住居跡



井原口遺跡 上. I号住居跡カマド内土器 中. I号住居跡貯藏穴 下. 挖立柱建物跡



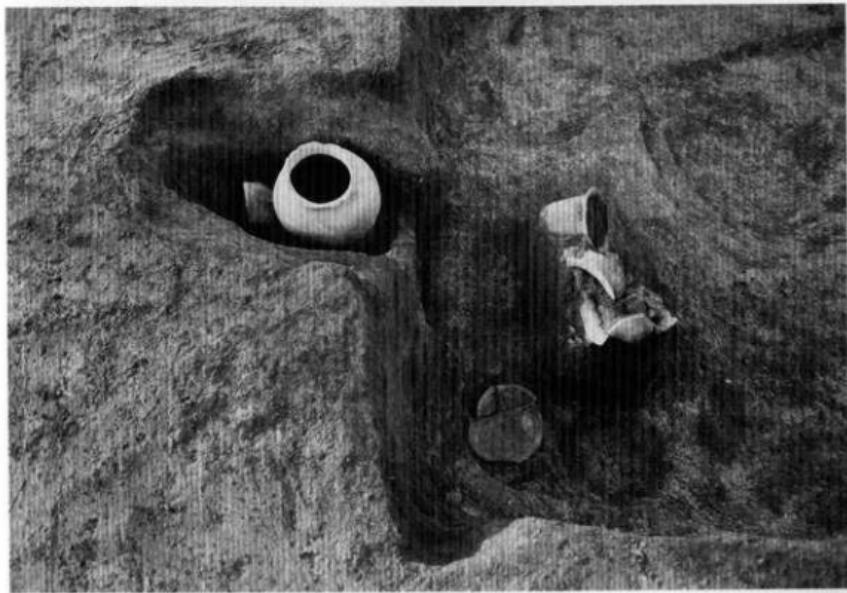
前津中の玉遺跡 全景



前津中の玉遺跡 I号住居跡

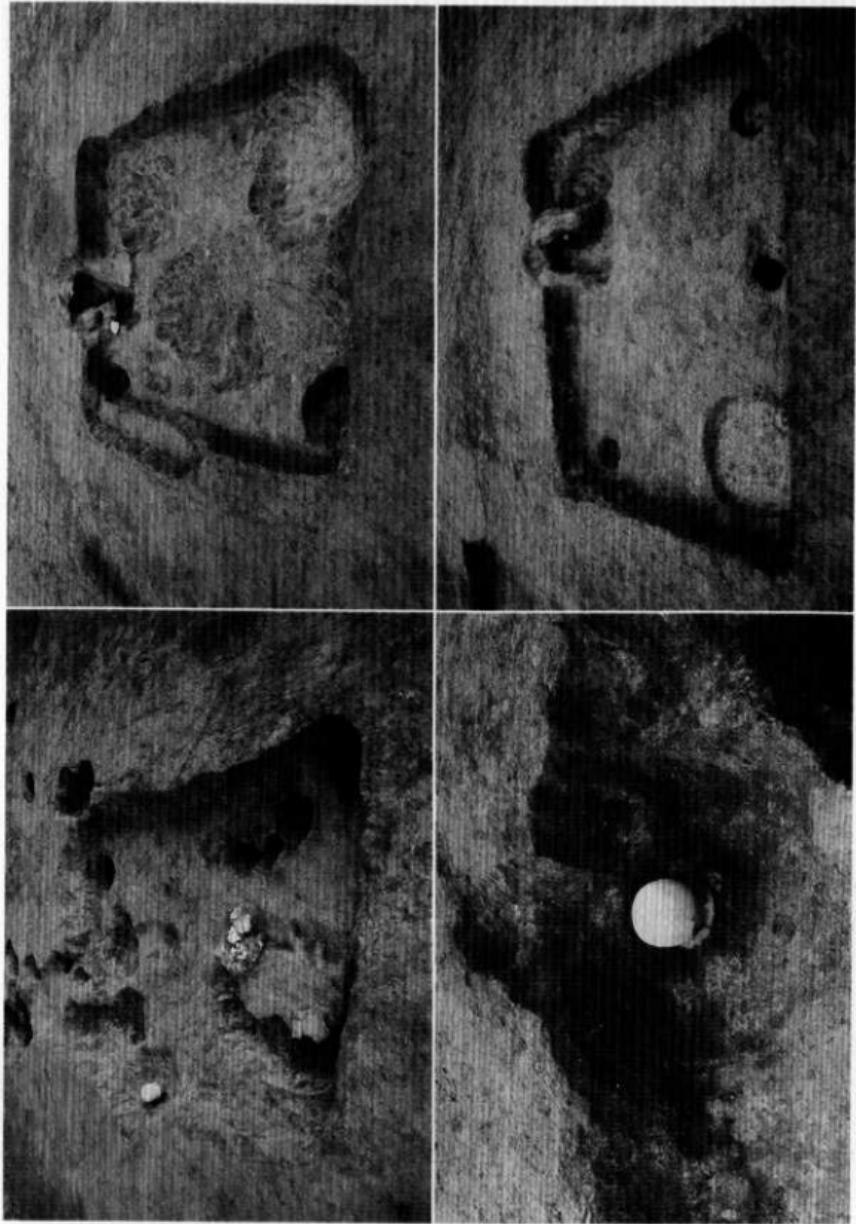


I号住居跡カマド出土状態（北から）



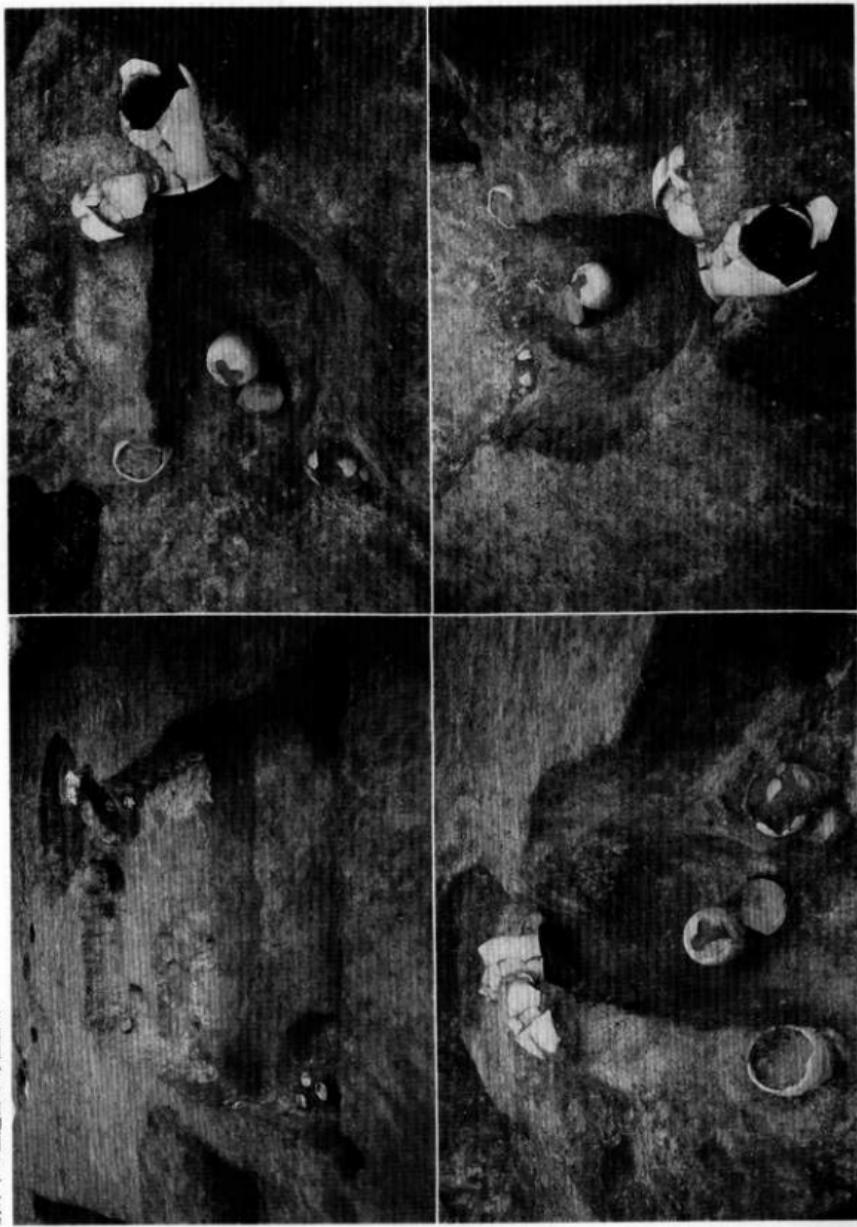
I号住居跡カマド出土状態（東から）

前津中の玉遺跡



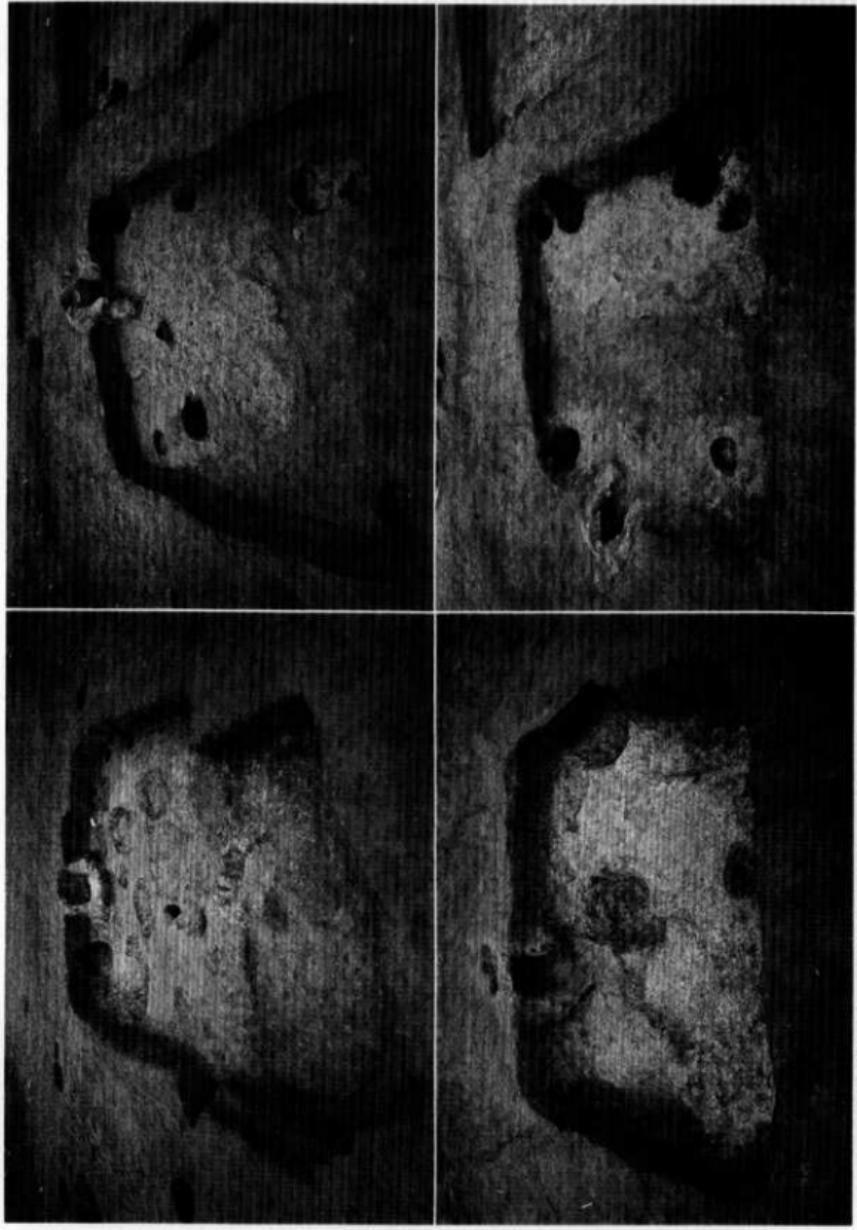
左上、2号住居跡 下、2号住居跡支脚用土器出土状態 右上、3号住居跡 下、4号住居跡

前津中の玉造跡 5号住居跡

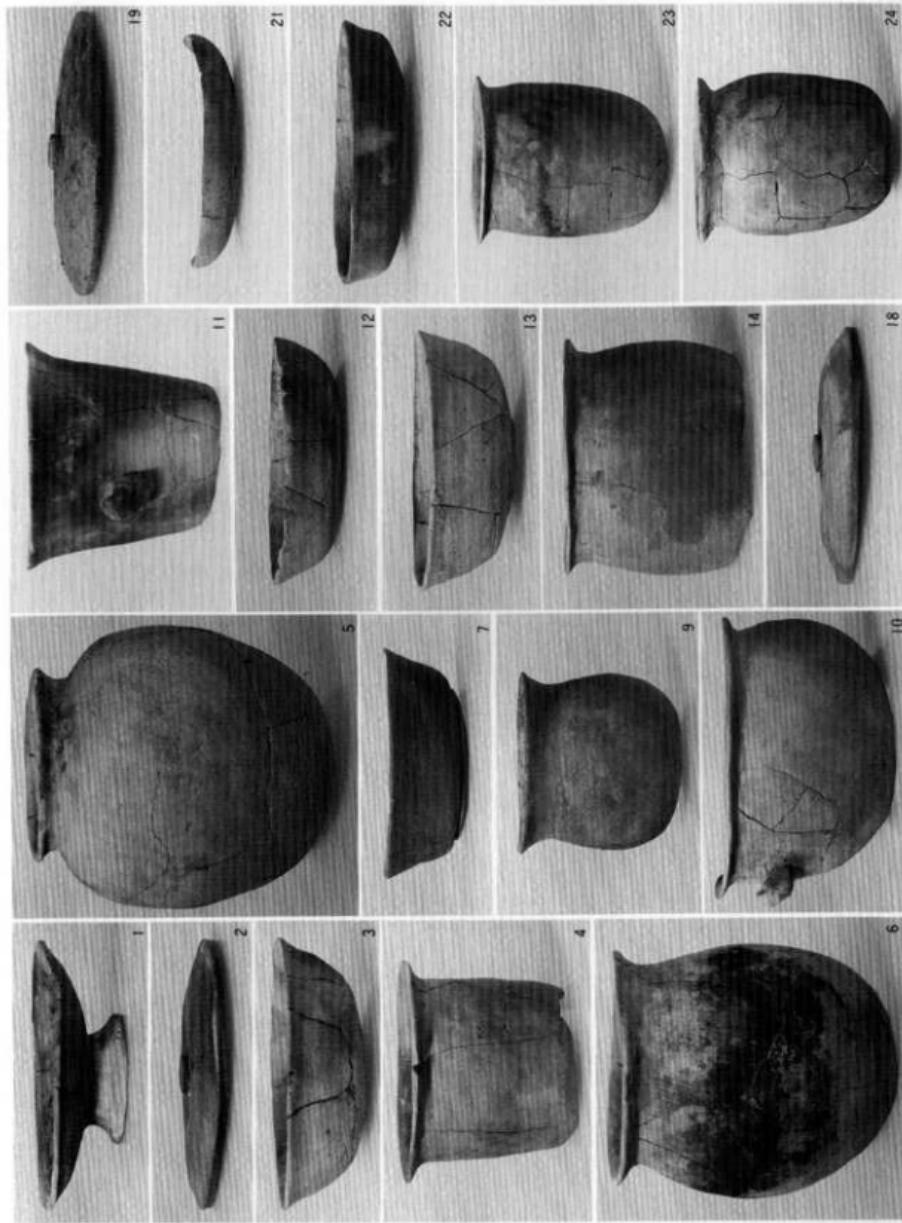


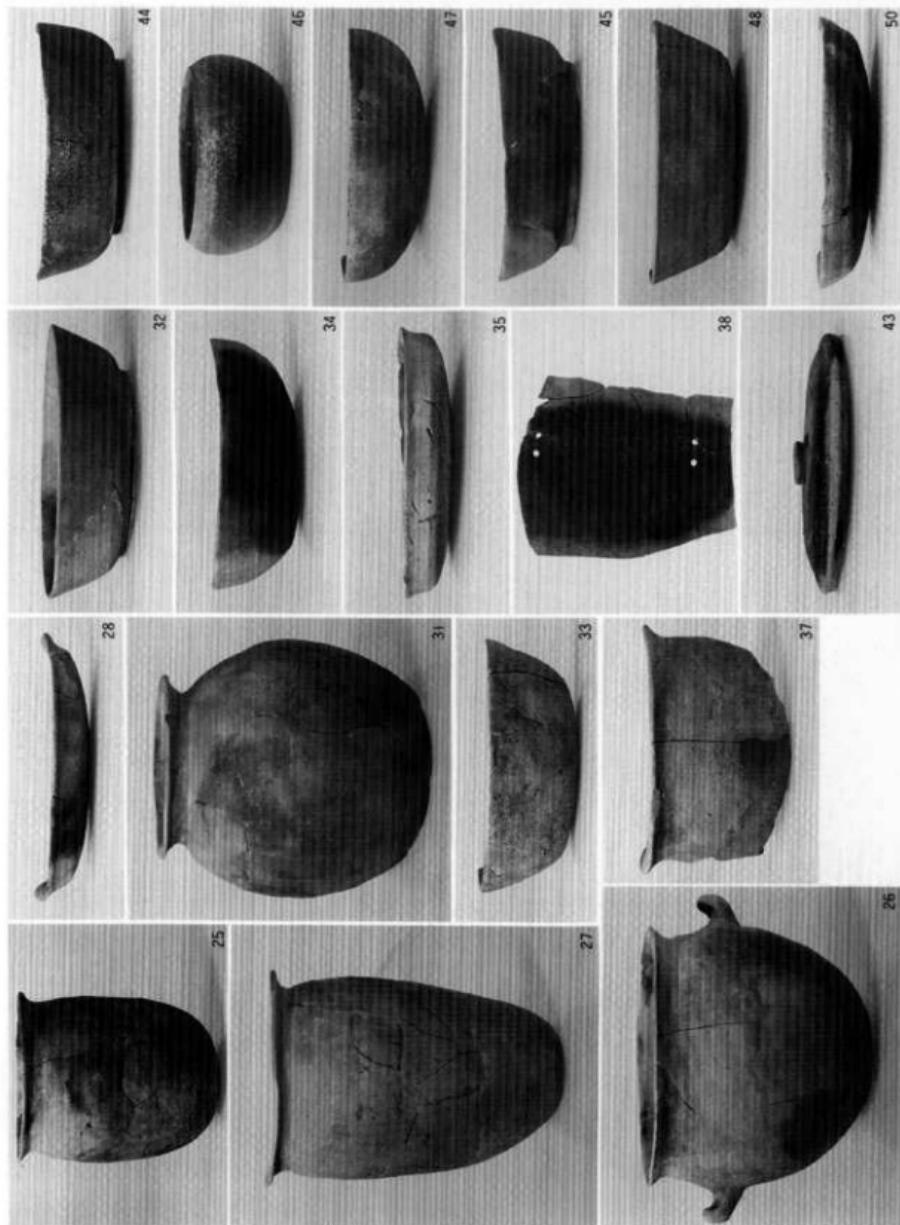
左上、5号住居跡 左下、カマド(焚口から) 右上、カマド(櫛から) 右下、カマド(煙道部から)

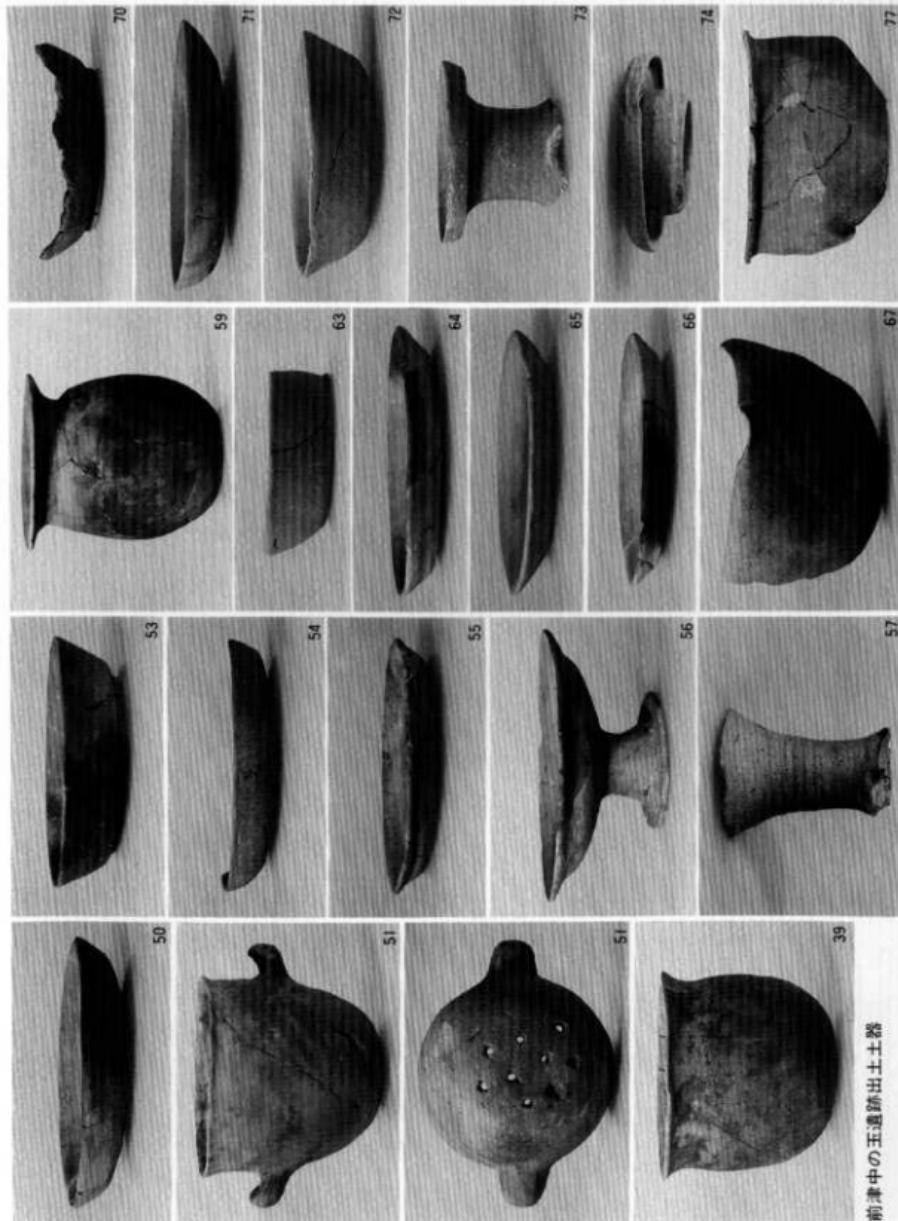
前津中の玉遺跡



左上、7・8号住居跡 下、10号住居跡 右上、11号住居跡 下、12号住居跡







前津中の五遺跡出土土器

前津中の玉遺跡

筑後市文化財調査報告書

第4集

昭和62年3月31日

発行 築後市教育委員会
筑後市大字山ノ井 898

印刷 日本商工株式会社 印刷部
福岡市中央区渡辺通二丁目9の31